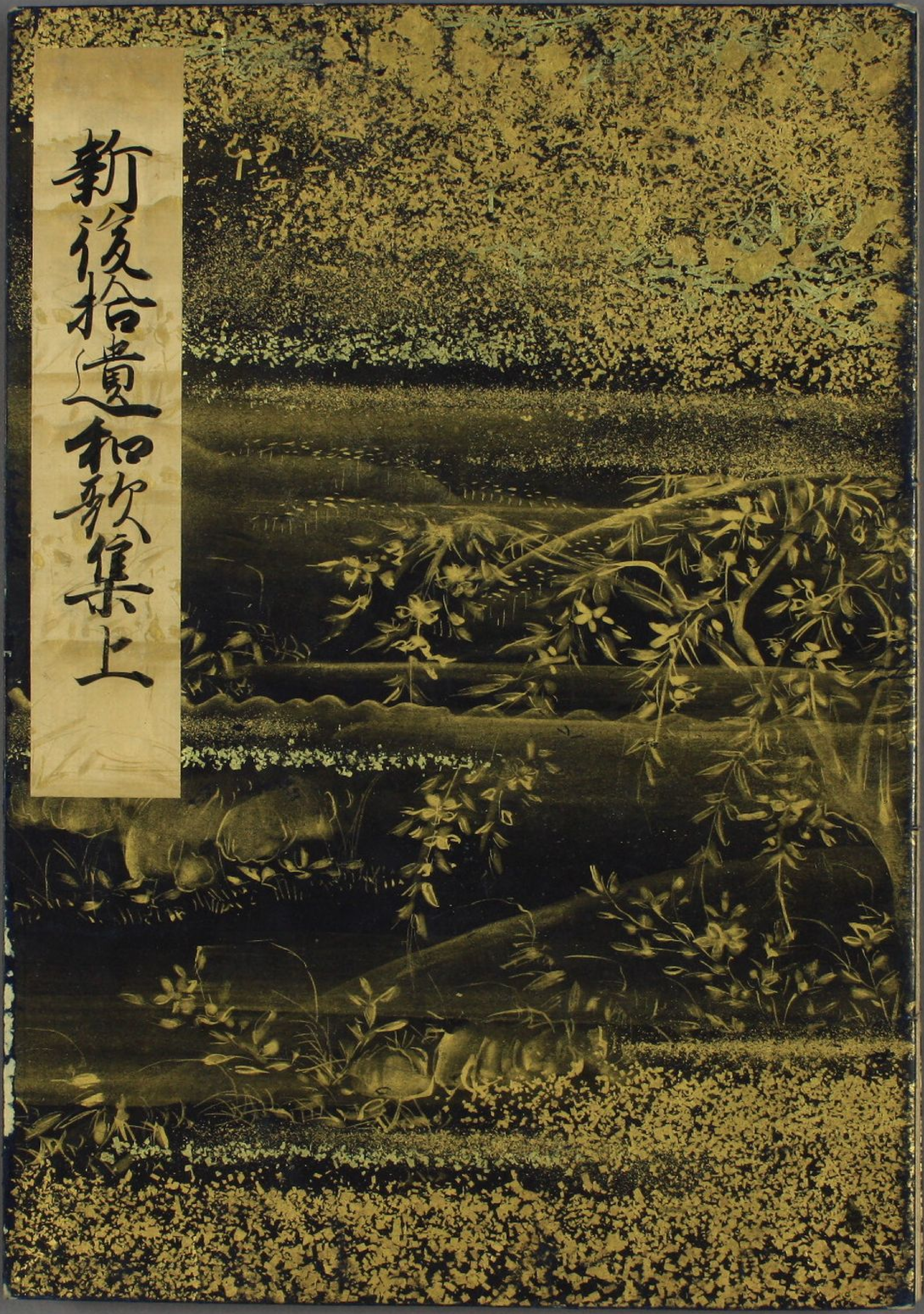

新後拾遺和歌集　上

しきしまややまとみことのうたはそれしとならわ
めつらしけしきもたりて花鳥さ
久しき神代よりつたはりてしきてうひあい
玉のみもまろのはと葉と見なれすさのおの
見しとふやつくもの雲のふるさとにはしとの八重
ありみそりしかまゝにひとりしを人のよそ
あそびとして花とめて鳥とうしやむから
ありうこれ露をあはれひ露とうかせ
とひかふかくつゝまずといふすなし
例よかるみさこのいさきよにえて給り

なしひ葉よそてしゝむしのやまとうけ
ことを字てもこのみちなくしたちとを
くるろまりありかへ風にそうちふち
つるかれたかさ山となり岩となほふて
けのきつくの雲ろさ海よいつくめうう
ことしいふしへのもしつまれ見んか世
たるまいろとしり民のみさかさつとを
いまひ猿ふるす皆命ありしかまつろや
いさしわつ君あめれたて志ろへしめする
こせかまつふみうりの基機よおかたり

よけるあまり〇さおもむくとしみこゝろとし
く花よりもかしこしめつる御めぐ
みさらくすしきたよりも尤もし
みちみ露ともふこえる人をもなくころを
ゆつりあやしのかぜようそふくうしこき
ともしもあちまちの小山を出る時にも
まりしるのみなしけす征夷大将軍たる
おそひまうちこさみかいとわこさまし
となさあうけくさのおとろへしとわ
こうしてかすハ八もみをはりつまうちすハ

まゝのことわさとあるそ波ことに光を
人も月をとかくせるおりなるへしこまに
よりて権中納言藤原為重に勅
せくいまへより今ふいてうまての奇を
あつめえらしめ給ふ件勅は波よひふ
しら玉は村まる数もなく難波江の
みつまやくりしはかこさあまぜる往を
かうへす志つはおましともろうる〇
あまはくかつめて多くまつしむ文治
のころほひ代には皇太后宮大夫俊成

よのりとうけるあとをしるしより延文のは
さしけき時よりいたるまで代々えらびとゞ
めおかる勅撰もこの家より出ずといふ
ことなし 今の世にかくす所人の心をも
とらはしにみちの記しつもといふ下
照の時にりそおそひよりさくまいりて
ますその子すなはちなにはさとせりふ
つけし 新後拾遺和歌集とい山の井
のもあるかれとくに志つ河のきよきにお
よぐとあるつくえしひさしあるかなるも

小倉八つぎの代よりつたへて六そぢにはよは
あまたり見えきの筆は松翁とよばるゐのい
はのなかま流とゑめりこては元久撰政
そつしきみとのりとよりぎり文永の相府
きさなまるゆとくとのこせりこれゆへよかゝる
とおりそれにもろそしつまとかそれて道
りふもろてなりしつそのへより亜三の
とし三月十日ゆまりふかん志つしなく
つけりくおつめゑてつもあれは大内山の
風よろ何としれ聲つとよそひしまちの風に

松のちとせれゑをたゝふへしといふす
しゝり

新後拾遺和歌集巻第一

春歌上

立春乃心をよみ侍ける

前大納言為定

天津空のかすみ渡て久堅の雲井はるかに春や立らん

はるのはしめのうたとて

源俊頼朝臣

立かへる春はきぬらし霞して吉野乃山の峯の村きえ

百首歌めしけるに

順徳院御製

吉野河山よりや春の越つらんせきあへくれと岩越す水

延文二年後光厳院に百首歌奉りける時

霞を

摂政太政大臣

春といへはやかて霞の中にたつゝいりせの河もおそくらん

建仁元年五十首歌奉りける時

前中納言定家

まきの海やまきふより春に逢坂乃山も霞て海せをそく

題しらす

壬生忠岑

足引乃山のひまより霞そて春気ちかしくふれる白雪

千五百番歌合に

参紘雅

晴やらぬ雲ハ雪けの春風に霧ふきまよふみよしのゝ山

正治二年後鳥羽院に百首歌奉りける時

後京極摂政前太政大臣

吉野山としも雪のふる里に松の葉白き春の曙

弘長元年後嵯峨院に百首歌たて

まつりける時春霞を

前大納言為氏

あら治の霧わけ人の山風に払ひもなく雪ハ降つゝ

正安六年紀伊にて二千首歌よませ

し侍るに

後光厳院御製

桜さゆる雪けの空の浅みどりわきてもやよそ霧も春

百首歌よませたてまつりし時山霧を

左大臣

山のはに晴ぬ雪けと見えても春立そむる霞なりけり

雅明親王家の十五首歌に

従二位家隆

もし嶋の霧春のはさそふ浦さ遠の宇治の河

題しらす

伊勢

春霞たちてのちも小みよせば春日の小野ハみ雪ふりつゝ

弘長元年百首歌たてまつりける時春雪

衣笠前内大臣

消えとまるむら消えかはるわか菜つむ末野の原に雪ふりて

題しらず

よみ人不知

打つけにさきなきをとゝもの白妙にまつ雪さそふ春鶯

寛治二年後嵯峨院に百首歌奉りけるとき

翫鶯

鷹司院按察

花ともまた匂ひぬやとの梅にしもなきや鶯春と思らん

弘安元年百首歌めされけるついてに

亀山院御製

梅かえにこつたふ枝によそにてもたちかへるふ鶯の声

また世なりけり

正中二年百首歌めされけるついてに鶯を

後醍醐院御製

春のくるしるしとかしは咲やらぬ花よりさきに鶯の声

嘉元二年後宇多院に百首歌奉りける時

後照念院関白太政大臣

春行のはやくもつける風にさそふ匂ひに春の鶯

題しらず

山辺赤人

春の野に鳴や鶯なつけんとわか家の園に梅か花さく

雪の梅の木にふりかゝれるをよめる

源信明朝臣

如の雪は下にくたつ梅も思ひに春の色そみえける

貞和二年光厳院に百首歌たてまつりし時

太政大臣

降つゝ梢の雪はあさ日にきえてすさき梅の花の色哉

若葉をとしみ待けり

前大納言為家

いさゝかは野へにてふる雪は花の小野に[illegible]

大中臣能宣朝臣

春風は吹ともみえて今よりはめつらしと人まつみよしのゝ雪そ降む

文保二年後宇多院に百首歌たてまつりける
とき

民部卿為藤

里人は今や野原に降雪も払もあへすわかなつむらん

百首歌たてまつりし時若菜

前関白 近衛

消かての雪も夜のまに春風に独そ若菜わかなつみける

おなしこゝろをよませ給ける

御製

ともすれはまつ野もせとなしはてゝゐさて忍ふ雪まわかまし

弘長百首歌たてまつりける時

前大納言為氏

誰もみな雪まをわけて春日野の若菜ハいくか人の摘らん

文保三年百首歌奉りける時

前大納言為定

うちさゆる春日野人の雪まより袖みえてあなわかなつむ
ゑしらす

中務卿宗尊親王

霰ふるつりまでのこのみゆきわかなつむまで数よけれ

弘長百首歌たてまつりける時

常盤井入道前太政大臣

故人今日や野原にうちむれてしるもしらぬもねもわかな摘ん

家百首歌合に若菜

後京極摂政前太政大臣

雪きゆる枯野の下の浅みとりこそのふる葉や根にかへるらん

建保二年内裏に百首歌奉りける時

前中納言定家

そのかみし春ハ雲井にならしける物乃家のまへの松の一もと
ゑしらす

清原深養父

春霞たなひきわたる巻向のひはらの山のこのめはるらむ

権中納言為重

百千ちとりさえつりし時山乃霞と

佐保姫の霞の衣をりかけてたちかさね山
影しらす　よみ人しらす　次
足引の山は白えてみえつゝも春の霞はそてにかゝれり
百首歌めされし次に浦霞のこゝろを
御製
春きぬと霞の衣あさしより海をはるかに神の浦浪
貞和二年百首歌たてまつりける時
等持院贈左大臣
難波かた芦火の煙そ風につれやそよ霞むこなた杉原
正三位知家
名もしらす

春の色いつもそれとも分かねとも煙そ霞むふもとの浦
弘長百首歌たてまつりける時
常盤井入道前太政大臣
今更にすまれとても難波かたむかしを梅と春の曙
嘉元に百首歌奉りけるに　梅
前大納言為世
梢にはよそにてそ梅花さすむらしみよりしるき春風
己心院前摂政左大臣
いつもそと梅の匂ひを尋ぬれはまかきの垣ねに春風そ吹
梅か薫とにほふらんとよその世やしりける

伏見院御製

木間よりうつる夕日の影なから袖まてあまる梅か下風

春の歌とてよみ給ける中に

藤原為兼卿下

梢をはさそひもあへて梅か香の袖まて春風そふく

延文二年百首哥めされし次に梅を

後光厳院御製

咲まゝに影その梅の花盛月そかすめる夜の風にまかせて

梅香とて

康資王母

梅乃花ひとよに春の風ふくより白ふ河そり袖にこそしれ

人々にすゝめ給ける百首哥に

殷富門院大輔

折る袖にふくとも匂へ梅花その移り香を誰かとかめん

見しらす

よみ人しらす

鶯のこゑめれ梅乃花のえは咲とも行ぬも色に出て

延文百首哥たてまつりし時

権大納言為遠

色よりも香をめてゝひあさき鶯のこゑめは梅乃下にも残れ

弘長元年たてまつりける百首哥に梅

前大納言為家

梅乃花香をうつりとおもひして宿はさくらに同人色か
ならしんと　式子内親王

袖の上に垣ねの梅は音信て枕にきゆるうたゝねの夢

天平二年正月梅の花宴し給ひてよみ
給ひける　大納言旅人

我宿に梅のちらる久かたの空より雪のふるとみるまて
花しらす　曽祢好忠

あゆゐ世をはしとそ思ふ春風にそよく春柳
百千鳥さへつりし時柳
前関白道家

立かへる梢はおもしろき春柳むかしのまゝになびく春風吹
延文百首歌めされし次にならしんと
よませ給ひける　後光厳院御製

吹風の心もしらて一すぢになびきさかふそ春柳哉
文保三年百首歌奉りける時
前大納言為定

あす風吹によしふるとやめ柳のいとくるしゆゑ
柳とよめる　宝篋院贈左大臣

しをれは柳の眉に浅みとりころもてに春風そ吹
あかし心と
前大納言為氏

浅みとりいと深ゝまて春風の枝まとふきて青柳のいと

延文百首哥よ　等持院贈左大臣

面影そ霞の玉ぬく青柳のなひく末ふく春風

百首哥たてまつりし時春雨　右大臣

春雨のふる日やなをも若草のしたもえまさる野辺の風

春哥の中に　源家長朝臣

春雨よ野沢の水はまさらねとも萌え出る草ふかく野

建保百首哥めしてまつりける時　正三位知家

なかめれは風もくもらぬ火も打春めく草や野辺の霞

ぬしらす　光厳院御製

清見さと今やかすむ山もとの霞かくれなき清見かた

文保百首哥めしてまつりける時　民部卿為藤

満てり影しつかに雲かゝる花もさかりになりにける

頃哉と　法印定為

とゝめても花のゆきふりし白雲のそのまゝにして明ゆくは

百首哥たてまつりし時たなひくを

権大納言為遠

春きてはゆきまにかゝる小松原ひきつゝ千代やゆくらん

文保百首歌たてまつりける時

前参議為實

こしの海や霞にかよふ浦の波よるかたしらぬ春は来にけり

春歌とて

藤原澄祐朝臣

時しらぬ河せの波のたえまよりへたてゝゆく春はありけり

土御門院少将

白波のよるとみえけり天の原霞める浦にかへるかりかね

中務卿具平親王

なきさへつる鳥の風に霞むともやそてにのみあらしのさそふらん

嘉元百首歌に

従二位為信

ゆく鳥の春はかすみてかすむもかさとおもふらん

暗夜帰雁といふ事を

建礼門院右京大夫

花もとそひとまちてめ有明の月ともえてもゆく雁金

嘉元百首歌奉りける時

前大納言俊光

横雲のそらにわかれてゆく雁のつはさもみえぬ春の曙

贈従二位為子

雁かへるとおもひし春のきのふけふやかへるらん

弘長元年七月七日十首歌合に

中務卿宗尊親王

春の色に人の玉つさ今はとそ入江にかよふ春の雁金

延文百首歌に花

寶篋院贈左大臣

咲やらぬもろこしの山風に待みをつくし雲霞も花とふるまひとよませ給けり

伏見院御製

桜花さきぬやいつこみよしのゝ春の山は霞こめけむ

花しらす

御製

桜も今や咲らんかつらきや山も霞て春めきにけり

正中百首歌めされしとき

後醍醐院御製

みよしのゝ山の山もとをさむ今いくかありて花は咲らん

春歌中に

藤原光俊朝臣

桜花さきぬらしあしひきの山の松に雲かゝる

延文百首歌奉りけるに

中園入道前太政大臣

あしひきの山の花は咲にけり横雲かゝる峯のあたりも

みゆるまて

新後拾遺和歌集巻第二

春歌下

題しらす　源俊頼朝臣

桜花咲ぬる時はみよしのゝ山のかひより浪そこえける

藤原清輔朝臣

なかきれ花のちりしくやみなせ川岸よりたつ水の白浪

道命法師

吉野山花の下ふし日数へて匂ひそふかき袖の春風

光明峯寺入道前摂政左大臣

足引の山さくら戸の春風になかめくるゝは花の香そする

源道済雲林院の花見にまかりて侍けるに
その桜をおりて又みせん人にとありけれは桜花
いま一枝をおくりすなりとやをくりて侍
けるに

和泉式部

そらにふさし一枝は成ぬやのこりぬもとは風にまかすな

寛元百首歌たてまつりける時

前大納言為家

一枝もおらてそみてしは旅てよ花みぬりのとくやおもはん

花歌とて　一品法親王寛尊

うきよをいつかたとかん山桜もよそとしね花やともな

津守国冬

山桜ちりかまかひのいかゝと家ちゝるとはもさくらかれ
花その中に　従二位巌子

白雲にまかへてみしもとしへけり花の盛やいくちとせん
影しらず　登蓮法師

年ことにそむるものゝ心はいかにみよと花の遠
従二位業子

あさすみや心ときえしは桜もかまてよつて世の春もろそ
文保三年たてまつりける百首に
前大納言為定

春ならしいそゝの数は花ならよ都のけき
延文百首たてまつりし
権大納言為遠

今は桜さけば花かれ冬みえそめのふりしきを
影しらず
白河院御製

白雲のたえまにかすむ山桜色こそ見えね春風
寂蓮法師

白雲ふきさなる峯にかゝる花は都の梢なるまり
建長六年三百首歌合
後土御門入道内大臣

山高み尾上の桜咲しより雲ゐるかたにかゝる春風

松間花といふ事を

権中納言為重

松の葉にすめるけしきは春風に尾上にさく花の色かな

文保百首歌奉りける時

後三條入道前太政大臣

へたつるも高き桜の名たかれはよそめにいとゝかゝりつる雲

題しらす

入道一品親王法守

日のもとにみえて雲ゐにかゝるさやあめのなかにや盛なと

百首歌奉りし時花

左大臣

かつらきや川そめし花の色なるも雲まて匂ふ山さくらかな

弘安元年亀山院に百首歌奉りけるとき

後西園寺入道前太政大臣

立こめし深き春とも花の色まかふや雲かゝる峯のまにまに

春歌の中に

前大納言為家

みよし野は今やさくらん花盛雲のかゝらぬ山のはもなし

百首歌めされしついてに

順徳院御製

花の色よ松おりしらぬほとゝきす高嶺のひかり峯の雲の上

建保内裏百番哥合に

八條院高倉

これやこの何とか世に思はれし花よりさきにすめる春の明ほの

百首哥たてまつりし時盛花

前右大臣

時のまにうつろひやせん花の色を今を盛とみる宮迄
能しらす

よみ人不知

春風も心してふけ我宿は花よりほかのなくさめもなし
花のみ世の中に

源邦長朝臣

驚そて多きをわくる梢よりうつる月の花散らく
ゑしらす

惟明親王

吉野山花しや花とみえつらん梢にかゝる春の夜の月

月前落花

大納言経任

春乃夜の月いりかたやなかむらん花散るもの陰なき

曉庭落花といふ事を

伏見院御製

梢にはもとなきすゝ庭の面の桜にかゝる花のゆふけ

文保二年百首哥奉りける時

前大納言為定

春ともの詠しさかしひに花とそ思へさそもと折やさん

昔わか近衛の庭にふれし右近の桜ちりしはおなしき
春の夜中に　　讃述云
花にほふ風ふくとも九重のみはしの桜ちらさすもかな
　　修理大夫顕季
桜花匂ふにつきて梢さく風の心のうらめしきかな
花のさかりやとみんくもゐのみかな
　　俊恵法師
錦しくそての庭ちるとしも春すゑまて花の雪けれ
和寺の前にて大井河に九千賀侍けるに
屏風に
　　後鳥羽院家隆

吉野なる梢はかりとおもひしに花をはらひてみゆるものかは
　　藤原實方朝臣
くもとのみみえつゝもれぬ池の花の鏡乃雲をおとけ
　　法性寺入道前関白太政大臣
花さくらおせにまさる山桜いつもちる花のつらになるらん
延文百首たてまつりける時
　　太政大臣
みよしのゝ瀧つ河内に花やちるおちそし消ぬみちをなかれん
百首歌たてまつりし時
　　從三位仲子

天の川さくらをつゝみてこそ浪よせくともみえぬ花のよそめ

寛元々年中に　後嵯峨院御製

雲井なる御階の桜花よりも天津乙女の袖匂ふまで

百首哥奉りし時

前関白 道家

風ふかぬ花のへの桜花またひとつぬかりとも雲とみえて

惜花といふこゝろを

常盤井入道前太政大臣

花まよふ麓の里吹山風にさそはるゝ峯の白雲

題しらず

津守國夏

桜色はわか深からし夜花はとあけゝるとみゆる曙

百首哥奉りし時落花

入道二品親王尊圓

桜も花ゆる庭のゆらゝれありて深世と春風そふく

延文二年百首哥めされし次に同心を

後光嚴院御製

庭まちはるゝ嵐とこゝろや花とともにすゑとも

権大納言時光

雲とみえ雪とふりてもゆかしきを庭ひとつ花の桜か

題しらず

鷹司院帥

昔よりいくよかへぬるさゝ浪や志賀の都の花のさかりに

延喜十三年亭子院歌合に

凡河内躬恒

ことゝもはいはず桜花水にもちるとみえけれ

百首歌たてまつりし時

関白前太政大臣

はるゝゆく嵐の末を吹まよふ山もとすゝき花の白雪

題しらず

為家卿

春風のよそにさそはぬ花もかな木のもとのみや宿と見ん

百首歌たてまつりし時落花

権大納言忠光

山桜咲ていくかそふるゝ峯にかゝるさ花の白雪

御製

山人のつま木に追風につゝまれてくるさ花の白雪

前関白 九条

木のもとにふるとみえてもつもらぬは嵐やはらふ花の白雪

花のうたあまたよみ侍けるに

寶篋院贈左大臣

ちるまの影ともみえぬ影をさへ花よりいかに春の夜の月

霞間月をよませ給ひける

伏見院御製

あまの河とほく秋の月みすむともおもふ心はさしてこそ

百首歌たてまつりし時春月

太政大臣

ゆくてにも影みえそむる有明の月秋よりもかすむ空かな

河上春月といふ事を

権中納言為重

よどがはやみかすむ月のかげながらかすみにいるる春のかは波

文保三年百首歌たてまつりける時

芬陀利花院前関白内大臣

照もせぬなかばいひとも春の光にて月は霞ぞなほまさりける

題しらず

崇光院御製

ふか山の木かげにみえて流るゝ岩清水こほれるのかや光なるらん

建保二年内裏百首歌たてまつりける時

前中納言定家

岩清水いつくそやそむる思ひ山のたくみの色をそへて

百首歌の中に

順徳院御製

水鳥のゝ山の春の秋ならぬ岩清水しかお

百首歌たてまつりし時苗代

儀同三司

此るはふるとしみえて前代のあせぬすゝみかへりて
覚しらず

小野小町

色も香もなつかしきかな蛙鳴井手のわたりの山吹の花

円光院入道前関白太政大臣

山吹の花さく沢をくちなしにうつろひゆくかをそ玉河

為忠卿家にて百首歌よませ侍りけるに
款冬を　皇太后宮大夫俊成

款冬も玉ちるとやゝかはんの露のこほれける山吹の花

嘉元百首歌めしける次に款冬

後宇多院御製

ちる花のしからみとはや吉野川あらぬ色ともさける山吹

弘安百首歌奉りける時

前右兵衛督為教

おしめどもつゐに日数はゆく春をかけて咲る藤浪

小野宮太政大臣家にて藤花おしみ侍り
けるによめる

清原元輔

藤の花こゝさ紫の色なりもおしむへと頼みそあれん

天徳四年内裏歌合によめる

平兼盛

わかゆきてとみかけり住吉の岸の藤浪おりふしにて

百首歌たてまつりし時藤を

左大臣

松かえにかゝりてや十かへりの花もとそ咲る春の藤浪

延文百首歌たてまつりけるに同し心を

太政大臣

春日の岸さ山の松かえに千代かけて咲は藤なみを

浪のうへよ藤はしまゝとみくしある

紀貫之

水の面に咲る藤を風ふけは浪のうへにも波そ立ける

延文二年百首歌たてまつりけるに

千種入道前太政大臣

池の面にみとりさしそふ松風によるの庭の春そよはに藤浪を

百首歌たてまつりし時

従一位宣子

とき色の松咲そふ千年藤の浪はまに又や三月の春を暮さん

九条前内大臣家三十首歌中に江上暮春

前中納言定家

堀江こく藤の小舟ゆきさらはやおしむ春とともにこそ行

嘉元百首歌たてまつりし時暮春

民部卿為家

今はとやむすびかへつる日数をもへぬる春のみこそ惜しかれ

悲しらす　皇太后宮大夫俊成女

つらきかな別は春に春ことへともなくさめてそ暮ぬる

土御門内大臣

いつはりを思のかつと歌つまし思ともと春を思ひさせし

弘長元年百首よみける時三月盡

常盤井入道太政大臣

月日とてやすくふるをそ暮てゆく我生命の春惜ち

たのしんと　躬恒

過ぬとも花をみんとぞこしつる春ふかし

春みつさうとこそ

新後拾遺和歌集巻第三

夏歌

正治二年百首歌たてまつりける時

前中納言定家

ぬきかへてしもとゝめぬ夏衣さてしも花の名残そゝ

千五百番歌合に

嘉陽門院越前

夏衣いそきかへけるひとへにもあちちるらん花の面影を

百首歌たてまつりし時夏衣

深守法親王

をしとてはなほやぬきかへぬ花衣着ていつまてのなこりなるらん

遅桜の咲くゝ待まゝとみんそよなか

西園寺前内大臣女

何となき春のなこりみとり鶯の心ありけるなきそさしける

元弘三年立后屏風に新樹を

藤原為名朝臣

青葉まても春の名残のみとりとも花そちりける梢なりけり

百首歌よませ給ける中に

贈従三位為子

袖にそふつゆさりもあらし卯花の垣ねはいつも秋の月け

一卯花と云事と

法印浄弁

卯花の垣ねハさなから夕月夜秋きよき人のたちやすらはん

弘長元年百首歌奉りける時

常盤井入道前太政大臣

布さらす宇治のさとの垣ねよりめにもしけく咲る卯花

中務卿宗尊親王家の百首歌に

前右兵衛督教定

神まつる卯月のまつりのかけ八十氏人のかさしさそさく

藤原為道朝臣ふるてひ賀茂祭の使つとめて侍けるにいひつかはしける

よみ人しらす

君か代にふたゝひあふひ神のめくみを重てそしる

返し

藤原為道朝臣

君か代に又たちかへりあふひ草かけてそ神のめくみをもしる

堀河院に百首歌たてまつりける時葵を

前中納言匡房

たそかれの光よなひく神山のふもとのあふひや日をまつらん

夏乃比哥の中に

花山院御製

去と今はくいこひり足曳の山郭公うちみえかなす

法印長舜すゝめける八幡社奉納に

侍従為親

つまこふやうらはらん人とに鳴ものゝ雲かくれにそなく

文保三年百首歌奉りける時

前中納言実任

待さきぬ初音をおしみし子規なれはよそにきかん人ならせは
思しらす

忠峯

郭公なかなくのゝ森のなこそとなきそや人よりはかなく森

珣子内親王

出るかとたのめしをともねさめの月に小夜ふけてなく

後二条院御製

なきぬへき時と思へは待るねにまさるへき鳴そめてなき

正治二年百首歌奉りける時

後京極摂政前太政大臣

今こんとたのめやしを郭公又あかぬ程を待らん

くれは百首歌めされし次に

御製

待しさつきのまつはせて待るさへも河郭公むかしかたらん

郭公ふるさとゝてやまめ

前大納言為氏

つねにさく櫻の本とて侍るまへにてさふらひて遊ん
左大臣家にて人々三首歌よみ侍りし時
詠侍るなんと

源義将朝臣

山里に去侍るまて実し侍る都よ詠といひてつかはしける

嘉元百首歌たてまつりける時同心を

前大納言経継

詠まれけるよ郭公の歌に山家の心をなりけると

弘長元年百首歌たてまつりけるは

衣笠前内大臣

思ひねを誰に忘れて侍る稀なる伝よまよふなかめん

延文百首歌たてまつりける時

宝篋院贈左大臣

人々と我よりは侍るせ侍るたのもしからむ心にて

郭公を

中宮大夫公宗母

まれにまつ我よりも人の侍る語りけん里にはおもふはかりと

延文百首歌よ

前内大臣實

郭公人伝てのみや聞ならひてそ我身よそ恋のさかりね侍る

題しらす

前大僧正慈鎮

手枕にちるくるらんすとも身親経ての秋の一夜とか

名所百首歌たてまつりけるに

正三位知家

明る今や都へいつゝなく志のゝめの里乃明くれハ忍

五十首歌の中に

後嵯峨院御製

これそ世にまつねぬ人のはつ音ともあかすなきぬるこゑのさやけさ

題しらす

西行法師

郭公こゝろわか一声をとこそいへ人よまちかねん

曙時鳥と

平氏村

明るそそ鳴へりきる横雲の峯より出る初しくさそ

里郭公といふことを

権中納言為重

山深くいはしかこえぬとや子規庭にて鳥羽の里に鳴らん

山里にきく郭公といふことをよみて

後光明峯寺前摂政左大臣

この里も杉つまたなくハ明るやこの山はおくとなるらん

題しらす

赤人

よものあをおりつゝなきことゝ子規なくなる声は初かなけさ

野宮入道前内大臣

志らせやゝ一声の郭公ゆくへもしらぬ人にはしと

貞和百首歌たてまつりける時

前中納言為秀

たへぬ世につまてなりにも子規ましらぬのねよそなれ

百首よみてまつりける時

従一位宣子

時はさやさつきあやめの時なれは里人もこさてやふきなん

ふへのをれこともと時なる教ともふるすとはかしまつりきに

左大臣

いく数とかそへん数も時なるなきさねとつり行ひきん

家にて人く三首よみ侍し小菖蒲と

あやめ草へふかはけよとなかさねと袖よりこする時はさにたり

五月五日くすたまをつかはすとて

なか世のためしにひくはあやめ草よはひもかけてひきそへよかし

枇杷皇太后宮

返し

おりからてひきつるあやめねとそてちよふるためしともなる

法成寺入道前摂政太政大臣

百首よみてまつりし時菖蒲を

前関白 大閤 九条道教公

あやめ草きふかはよはまつやよろつよのよおつゆことを数へん

前関白 近衛道嗣公

ひきそふはやめ草の根長をやいそん一本ねはかり

夏哥の中に　中宮大夫公宗

なつきぬとおもふ心にまかせて行水のみきはにたてるあやめ草か

一品法親王寛尊

くまなくにおもひくらふるさとのあやめ草人もさそはてけるらん

百首哥めされし次に五月雨　後光厳院御製

五月雨はあやめ草の軒よりも猶おちまさる軒の玉水

夏哥とて　前中納言定房

五月雨は宿にはいつまてあやめ草軒のしつくにまさるとそ思ふ

題しらす　寂蓮法師

小山田にひきまかせたる縄のおはやたえて五月雨の空

百首哥よみ侍ける中に　皇太后宮大夫俊成

稲まちさしわさ田の早苗とくきりの杜風のふむますらん

題しらす　民部卿為家

を山田に板井の志水くみためて我門にすゝむる早苗哉

進子内親王

秋まてる外面の苔よその蔭て早苗涼しき山の下かけ

文保百首哥たてまつりけるに　前大納言為定

早苗とる遠田面も山陰のくるゝころかへる里人

百首歌奉りし時梅

前関白 九條

匂ひくる花橘の夕風にたれむかしをおもひ出すらん

右大臣に侍し時内裏にて三首歌

よませられし時廬橘を

左大臣

身遠かるみし人なまらつゝ程袖にて匂ふさゝむ

家歌の中に

中納言家持

我宿の花橘にかゝきす来てくるけは急まさるらん

前関白 道家

なくねをや思ひそてまし時鳥今のさ月の世の世は

藤原清正

夏の夜の月まつ程は時鳥わが宿りをそてなけ

山階入道左大臣

たちかへる五月の世とも時鳥おもひしにをふはいそつ

百首歌奉りし時郭公数遍を

藤原為平卿

老遠にやゝ鳴ふるて千鵆今はきても誰ふるらん

後鳥羽院御製

思ひしらず

夏の歌よ落ちかさなく時鳥さみたれてこそ数はまさりて

右家百首歌よみてたてまつりける時

皇太后宮大夫俊成

五月雨のをやむ晴間の日影にも猶雲ふかしあまのかく山

百首歌よみてたてまつりし時五月雨雲

権中納言為重

暮ぬとてみるへき月もたえぬ雲にあらさ五月雨の比

津守国量

いくかやふりぬる雲の五月雨に横川の水もはやまさるらん

建保百首歌たてまつりける時

順徳院兵衛内侍

五月雨はとをさと原ともみえぬせはあさのまにかく小倉山

後伏見院御製

ゆふことに行かひかねの河浪のはやくもまさる五月雨の比

文保三年百首歌たてまつりし時

後西園寺入道前太政大臣

日をかさねいりえの浪さへ水まさりよしの河よと五月雨の比
見もしらす

従二位家隆

庭の面に流れしさへも岩越えてかはとせきやる五月雨の比

延文百首歌よみてたてまつりけるに

寶篋院贈左大臣

五月雨のみかさまされはおほゐ川ゐせきの関もなきさせぬかり

百首哥たてまつりし時河五月雨

関白前左大臣

おほゐ川はやすの(ふ)かくは関は世ふかくをも志し五月雨は

たかしくそとしらせ給けり

御製

みよしのゝ河やとたえぬ五月雨に岩こしみなき瀬の音そあハ

百首哥たてまつりし時五月雨

前右大臣

そこ清しぬさゝしかし五月雨よりくゐなそ山川の水

然しらす　頓阿法師

名のみして山は朝日の影もみす八十宇治河の五月雨の比

嘉元百首哥たてまつりけるに

前中納言為相

瀬田川は浪もやゝにこえて志なかまてにこる五月雨の比

夏哥の中に　津守国道

いくわたり入海遠く成ぬらん海人の橋さへかれにけり

前大僧正慈勝

いくわたりかけし千々

夏哥の中に

前大納言為定

五月雨にみちそふ浦の白玉や底にそふりゆく数はみえん

延文二年百首歌奉りける時五月雨

太政大臣

志賀の浦や浪のまにまにあま衣たちも浦のはまあらし
おもしろきを

津守国夏

仲さおあさりの塩やきゝの煙やかとやのへ青葉の
名所百首歌奉りける時

従三位行能

難波かた小屋のやへふきあらはれて芦間にやとる夏の夜の月
題しらす

左兵衛督基氏

忘れては秋かとそ思ふ虫もよかよむ夏の夜の月

百首歌奉りし時夏月

権大納言為遠

夕暮はくれそつきぬる露とともにしみわたりぬ涼しさを月け
おもしろきを

前大僧正澄舟

見る程もゆくかたもなき夏の月やく人の袖にかゝらん

従二位厳子

鳴出る山のはしらぬ中にまきり月はゆきさき夏の夜のそら

照射といふことを

和泉式部

夏の夜のともしの鹿のめもあはせぬほとにあけそしにける

権中納言為重

さ月やまこすゑかしけの松山よまつとて鹿もかよはなん(かな)

文保三年百首哥たてまつりけるに

前大納言為世

大井川山かけくらく漕つれてもみちせにちかふふねのかよひち(影)

二品法親王家五十首哥に鵜川のこゝろよみ侍ける

惟宗光吉朝臣

うかひ舟のかりもやらぬ鵜をいせにかへすかゝり火の影(けふ)

延文二年百首哥たてまつりける時

権大納言時光

うかひ舟くたすもやをし河波よるかけくらきえぬかゝり火(のかけ)

嘉元百首哥たてまつりける時

前参議忠定

夏草は志けりにけりな大江山こえていくのゝみちもなきまて

従二位家隆

春そめしのへのかへるさに雨はれ駒なれにやまさる人もつれ(つれ)

正治百首哥の中に

後京極摂政前太政大臣

このころは宿のさゆりもなつかしきひかりそまさす(まん)

延文百首哥たてまつりけるに蛍

太政大臣

かは出ぬれてもとりその葉ゆゑをとくわかれてふ螢かな

正治百首歌に　式子内親王

あくるまて岩まにかよふ夜半のゆりきてそ秋をしるへかりける

百首歌よみてまつりし時

按察使資康

はしゐするあたりもすゝしさも影みえて石井の水にとふ螢かな

千五百番歌合に　後鳥羽院御製

風をいたみ蓮のうき葉に宿しめて涼しき玉に蛙鳴也

題しらす

前大納言実教

風のふく池の蓮葉におきてかへすにこほれてつゆの白玉

貞和百首歌めしけるついてに

光厳院御製

夕立のふりきる池の蓮葉にくたけてもろき露の白玉

宝治百首歌奉りける時夕立

後深草院弁内侍

かきつくるかゝる雲や晴ぬらん山のはさきそしらみそめける

祝部成茂

夏山の木葉の色はさなからに光消ぬる夕立の空

夜歌の中に

前参議能清

一むらやそゝきもあへぬ夕立の行雲のこなたそすゝしき

備正果守

夕立の一村過て露ちりて虫のねそへぬ杜風そふく

延文二年百首たてまつりけるに

前大納言為定

なる神の音はかりのこさて程よく山風すゝし夕立の空

前大納言公蔭

稲妻の光のまともいふはかりはやくそゝくる夕立の空

嘉元百首歌たてまつりける時

前大納言為世

夕立のはれゆく雲まより雨と分てもさす日かけかな

後宇多院御製

ゐよ峯の雲は稍またとも雲ふかく夕立の雨色しらす

よみ人しらす

ゆく末は露さへかゝらし夕立の雲にあまれるむさしのゝ原

蝉を

前大納言実教

村雨の名残の森の露は猶落て梢にうつる蝉のもろ声

前大納言俊光女

雨はるゝ夕山陰によるく蝉の声よりおつる木ゝの下露

文保百首歌たてまつりける時

後山本前左大臣

かよひこし宿の追風よそにしてへたつる蝶の夢
なれや百首の哥たてまつりける時

前中納言定家

世をいとふ家の小蝶とまつはるゝひまもあらぬ山の曙そしき
延文二年百首哥奉りける時小納涼
と

太政大臣

涼しさはいつもときはに松風の都にちかき山の陰(?)
木なしんと

源彩光卿

志水ある心のうちや松陰の水よりもなほ涼しかるらん

前中納言雅孝

山川のわかれ木陰の夕すゝみ岩こすなみに秋やかよふ

後醍醐院御製

涼しさはいりてやとまんみちのへの桜井の里の宿はちかしも
和哥所にて六首哥よみてたてまつりける時

後京極摂政前太政大臣

松かえのゆふされ漆の夕暮にいとふからんおきの秋風
覚しらす

好忠

芦のはにかくれてすめは難波女のこやは夏こそ涼しかりけれ
貞和二年百首歌よみてたてまつりけるに

等持院贈左大臣

なにハ人かりそめふしも夜刈の芦の一夜に秋を浦て

百首哥たてまつりける時六月秡

権大納言為遠

みそきしやうきみをさとも志らゆふの志らしもかせてあさ[業]

入道二品親王尊道

見しはや川瀬のなみにかけてさへまつ世にかゝす山桜かな

夏哥の中に

前大納言資名

山桜川のせにも[夜も一よの]ひのまつよむすふと妹か風そ涼き

延文百首哥奉りける時夏秡

入道二品親王覚誉

みそきしてかへさ秋ふかき河浪の秋よりさきの涼さ

おもしんを

左京大夫顕輔

河のせにおふる玉もの(?)ゆくへなひきそとまるあつさしへかれ

新後拾遺和歌集巻第四

秋歌上

百首歌たてまつりける時初秋の心を

太政大臣

わかやとの荻の葉に吹てそめし一葉のほかに秋の風

貞和二年百首歌たてまつりし時おなし心を

等持院贈左大臣

このねぬる朝けの風のかはるより荻のはそよく秋はきにけり

文保三年百首歌たてまつりける時

前中納言為相

明ぬまそ人よまつ通涼しさそのきといそく難風

百首歌たてまつりし時

前関白道嗣

涼しさはまたいつはりを吹かへる風とてきのふは夏やさりなん
覚しらす

西宮左大臣

きのふよりは妹のしめしと思ふにも袖ぬらしそと露をかれ

宝治百首歌たてまつりける時

皇太后宮大夫俊成女

風かよふ夜は扇は手になれて袖よりまつかる秋の初露

嘉元百首歌たてまつりけるに七夕

贈従二位為子

渕ハ世にかはらぬ程を天河年わたりの契りにそしる
たかしらてとらまほしけり

花園院御製

ゆくさきの世ゝの橋のひまとてもあまぬはたえぬ流なれとも（もなき）

百首歌めしゝついてに

御製

年をへてたえぬちきりの逢世とやかはらぬ瀬にそ天の河（浪）

弘安元年百首歌奉りける時

入道二品親王性助

こよひをも猶すゝき契や恨むらん年に稀なる天乃河らも

七夕契といふ事を

入道二品親王法守

織女の恋も恨もいかにして一夜のうちにいひはつくさん

百首歌奉りし時萩

左大臣

秋の夜は風露乃たまて萩かえをたわゝにかゝる秋風（吹）

前関白 太閤

秋風の吹たつ時ハ萩乃うへ露そ中ゝ實さかりける

文保二年百首歌奉りけるに

後西園寺入道前太政大臣
かきつらね晴わたりと鳴そともきこえさき萩の上風
題しらす
祝部成氏
萩のうへの露をも袖にほしかねてひきてあまる涙に秋風ふく
前中納言定資
ほとゝみの郷のはしを照て露まちかける野への萩かな
従二位叢子
宮城野に志らしも庭の浅茅生やしたはの小萩露も
たまらぬ
嘉元百首歌たてまつりけるに
前参議忠定
こやさ野の露分衣袖そへは志らみの萩か花すり
題しらす
正二位通冬女
露のおきかくるはさそ志らてやさしき萩の袖に嵐そふく
藤原行朝卿
ま萩原秋の花野はよもすから衣露にほゆせて野もせ也
文保三年百首歌たてまつりける時
前大納言為定
にほさてこそ野中の水に移しつる花の色に萩が露かゝるらん
百首歌めされし時萩をよませ給ける
御製

九重や今もむ宿の萩か花いくよふるえのなまさくらん

嘉元百首たてまつりける時

前大納言為世

野へとはゝ〇をはてゝも花薄袖とあつめてたゝ逢

題しらず

山階入道左大臣

まねくとてゆくともよしも逢ひの小人あれぬる花薄

民部卿為家よませ侍ける十首歌に

法印覚寛

招くとはふらぬにみえて花薄我かとひとく人そなき

野径薄を

源頼之朝臣

折つれは袖よりあまくなひく也尾花かもとの人と秋風そふく

嘉元百首たてまつりける時

民部卿為藤

花薄されとも海まとしみるあれなの秋津ふるさとにまねくらん

題しらず

中務卿宗尊親王

今よりはあれのまれ秋もおもひいて入野の薄なれせさるや

家百首歌合に野分を

後京極摂政前太政大臣

時のまて花ふとらぬ業の上にも野分ふきたつる野への夕暮

従二位家隆

うきよにはかゝりまてこそなひきけれ野へにはこゑはなけれ 藤原

刈萱をよめる　瞻西上人

咲ましる花のちくさもあらはれて乱るゝ野への虫の聲かな

入道二品親王家の五十首に為虫歌

前中納言定家

松虫のなくこゑ咲花のいろ／＼にしき露やをくらん

弘安元年百首の歌たてまつりし時

後西園寺入道前太政大臣

暮ゆけは虫のねよはく成まて露もちらさぬ萩かすゑやと

弘安元年の百首の歌に虫を

前大納言為氏

わかさ風まちつる程の荻のはもひやかなそといそとなれし

貞和二年百首の歌たてまつりける時

太政大臣

よそにきく都たにしあはれと蟀枕の下に鳴らしものかん

人々に百首の歌めしけるに鳴虫をよませ給ける

後光厳院御製

鳴の枕乃下にきこえきてねさめをかしくさらしきりぬ

延文二年たてまつりける百首の歌に

寶篋院贈左大臣

見るまゝに門田の面は暮そめて稲葉によわる風の音かな

百首歌たてまつりし時

従三位仲子

み渡せは山田乃かりほのいほりにはひきはやまて蛬なく

文保百首歌に　　前大納言俊光

夜はもさむき霜のかりねになく蛬のねよわりて秋かせそ吹

建保二年内裏秋十五首歌合に蛬

参議雅経

よひのまもそてもみたるゝ蛬の鳴さむ時や秋のゆふくれ

秋寒と云ふなと

従二位業子

待まちの人はしらすとも宵とも月にたゝ鳴声そ更ゆく

百首歌めされしついてに

御製

いつはりのなかしひの妻恋にたつ蛬かねさしとしの恋

夢しらす　　よみ人しらす

蛬ふくらぬ数に鳴蛬は野辺の妻をや恋しかるらん

権大納言為遠家にて人々三十首歌よみ

侍けるに

祝部成光

ま籬ちか蛬の聲風やさむしと拂この蓬は蛬そ鳴なる

百首歌たてまつりし時　蛬

た米へ僧　道敬

秋よるそて妹まちかぬる妻恋ともさへまつ秋とよ乗や鳴

嘉元百首哥に秋夕

前大納言為世

なかめこしひともまたて多のこゝろにそへてくる秋の夕暮

百首哥たてまつりし時おなしこゝろを

権中納言為重

一とせにひとたひつゝあふその夜さへなほわかれぬ秋の夕暮

建保百首哥たてまつりけるに

前中納言定家

あまのかはよる鳴る音よわりて波のうちふむ川の声

嫌哥の中に　崇徳院御製

露のいのちさへつらねあまの玉つさとるそらくしきあまの妹

契しらず　暮

権少僧都覚家

暮晴なき心をそへてねかふことをなのむ露のさき

百首哥たてまつりし時

前関白　大閤

たなはたのこゝろのそらなる玉つさとふあはれをそへてつゆのきえ

おなしこゝろを

坂上是則

いくとせか雲の林とこれ都をともにしてつゆのきえ

延文二年百首歌たてまつりける時

寶篋院贈左大臣

[illegible]

秋哥の中に

中務卿宗良親王

この里は村雨ふりて[illegible]山よ[illegible]

[illegible]

衣笠前内大臣

[illegible]山の梢もさやか[illegible]

入道二品親王尊圓

[illegible]月[illegible]

文永百首歌たてまつりける時

[illegible]

前中納言定家

[illegible]

弘長元年百首歌たてまつりける時

常盤井入道太政大臣

[illegible]

文保三年百首歌たてまつりける時

後光明照院前関白左大臣

[illegible]

よみ人しらす

河霧[illegible]宇治の柴舟

百首歌たてまつりし時雪

権中納言為重

たちこりて雪ぬれてそと来みえてあふさま門よりまろ白浪

貞治百首歌たてまつりける時

皇太后宮大夫俊成女

立こむる雲路もしらぬ夕霧に猶吹こゆるすまのあきかせ

貞和百首歌よ

後岩屋前関白左大臣

くもりなきやそてまつ洞にすむかけをそてかさきこゆる月

百首歌たてまつりし時暁月

前右大臣

出やらぬ峯よりさきの月影にあらはれわたる雲の色しらす

等持院贈左大臣

わきもなく松よりうへに数ふえり木の間にうつる山のはの月

延文二年百首歌たてまつりける時

権大納言為遠

峯こゆる程そしらねかゝる雲の立そふ陰をも出る月かけ

月歌の中に

後鳥羽院御製

いまそみるつの松を雲晴てさまよふ峯をも出る月影

月前風といふ事をよませ給ひける

伏見院御製

しら雲を山のはふかくみえて月まつのに吹峯の松風
嵐ふく峯の浮雲はれてこそ空にしらるゝ月のかけ

延文二年百首哥めされしついてに

後光厳院御製

ゆく末もたえぬ雲を吹かへて風こそよそにしらるゝ月かけ

亀山殿にて人々題をさくりて千首哥よませられける次に月を

後宇多院御製

空にすむ影もなくふわたる月みるよひはあくまてそ（も）
れなし心を

後京極摂政太政大臣

雲はゆく千里の外の空はれて月よりつむ嶺の雪（ゆき）

在原盛徳

山のはの月まつほとに浮雲のはれゆくまゝに秋風そふく

津守国久

梅さかぬ木間をもれて嶺風（にけ）につれて出ぬる山のはの月

正三位成国

雲はらふ風の跡より出てこそはるゝ影の秋のよの月

源経氏

はれて月にかゝれる浮雲をやかて晴ゆくよはの秋風

津守国夏

天の川月の影も玉しきれ光に見えて秋風そ吹く

文保百首歌奉りける時

前大納言為定

あまの川風は吹はらふ雲の通路月そさやけき
月のかくれそよそにまかせける

後二条院御製

行しらぬやまの端山をさしもかつおもはた我宿の雲に入月

題しらす

待賢門院堀河

逢坂の関の杉むら霧こめてたちともみえぬ夕かけの駒

法性寺入道前関白家百首歌に

皇太后宮大夫俊成

清見かた浪ちさやけき月とみて磯そこや関とりけん

建保内裏三首歌合に秋野月

皇太后宮大夫俊成女

思出よ露と一秋のしくへにもかく篠すゝき野辺の秋の月影

題しらす

太宰権帥仲光

行人の袖にくむ萩に野みえて月もうつる野ちかき山

大蔵卿有家

ゆゑて小みゆの野中の忘水秋のもとちりや月をやとさむ

弘安百首歌に

前大納言為兼

蓬生の露ふかき庭にふりにし世よりも月そすみけり

建武元年九月十三夜内裏にて人々題を

さくりて哥つかうまつりけるに水邊月

前大納言實教

秋の水すむ空ともてゆく水のよとまてぬるゝ月の影

題しらす

津守國道

みなと江は芦のそよくれ志きれ潮みちぬる瀬の月

水上月を

よみ人しらす

みやこそゝや水ともみえわかぬてかゝひてすめる秋の夜の月

新後拾遺和歌集巻第五

秋歌下

秋歌の中に　　順徳院御製

稲田かるかりほの遠屋にすむ月はいねまもさらぬ秋のさ夜

田家暁月といふ事を

仁和寺二品親王守覚

明ぬとやひかりうつろふ月影に今そ門田の鴫もなくなる

題しらす

津守国助

宵のまは田面の末の山のはに月まち出て秋風そふく

如願法師

わきてこの庭の秋風吹そめて袖さむき月をみる哉

文保百首哥奉りし時

前大納言為定

よる/\は月の影もやうつるらん嵐の山風おろしのみね

人々に二十首哥めされしついてに

御製

天河雲のみをより出て瀬々の世とにもあかぬ月かけ

題しらす

よみ人しらす

月の舟わたらむ空の海星の林は晴にける哉

水郷月と

津守経国

久堅の中にありてふ里なれと宿には志るしよその月かけ

題しらす　　法眼慶融

数ならぬ身をしる袖の涙とも月よりほかは誰かとふへき

為冬朝臣

あくかるゝ心そよそにまてさやけきよはの月にそふらん

嘉元百首哥たてまつりけるに　月

従二位為信

いくとせの身そとも身ならさし秋にかさねて月をみるかな

題しらす　　藤原仲實朝臣

ゆふ霧にみちとも遠によりかゝり月は峯ゆきも無ちかけり

月哥の中に　　前大納言為家

行末も袖の影ならは月をかならす宇治の河長
月影よ出てゝ浦の秋なれはたえすやくわかまし煙遠

百首哥めされし次に　浮月

御製

夕しほの満くる遠影のひくに浦の梢のよは月

磯月と　　左兵衛督基氏

舟とむる磯の松原ものまにや月のかつらに風そやま

百首哥たてまつりし時　湖月

右大臣

月かけもあらそふかたの浪やおほとし霊ハしらぬ浦風
寛治百首哥めしてたてまつりける時同心を
安嘉門院高倉
くみ出ありぬ梅の月影ハ光をみかくしられし浪
百首哥よみてたてまつりし時
前関白 通宗
山のはをわきそていてし月影のいてゝ海をうらみかへり
月の哥とて
源頼春朝臣
浦浪のかくにも秋まや更ぬらし月にしらまる志ほ風
中納言基成

あくまてと浦わにハ出まほしきうきねにいる月をも
西園寺入道前太政大臣家にて人ゝに十首
哥よませ給けるに橋月
藤原信實朝臣
なかそらの舟橋秋をとけて月にそゝくる梅の樵人
題しらす
藤原長秀
あらし山先の色もる月影によやうら秋さむ浅茅生の宿
百首哥よみてたてまつりし時
従一位宣子
たかしきてかけの月はかけある秋やなかりしまさき露や手枕

月前露といふ事をよませ給ひける

伏見院御製

更ぬるか露のやとりも数そひて浅茅か月に秋風そふく

題しらす

仁和寺二品法親王守覚

おほかたの秋は月は露にけさ涙によりてそやとる袖かな

弘長元年百首歌たてまつりける時月

信實朝臣

ぬれてこそ月をもやとせ我袖の露をはいとはし浅茅生も

嘉元百首歌たてまつりけるにおなしこゝろを

正二位隆教

それとなく身の思ひになしはてて秋のいくよか月を見るらん

山路月を

伏見院御製

誰にまた月ならかはさましつれぬ山路の旅のこゝろを

題しらす

大蔵卿有家

末の松まつ秋ふけゆく空そなく涙より出る山の端の月

延文二年百首歌たてまつりけるに

等持院贈左大臣

みとりしろくそさえて月影のかゝりぬる峯の松風

前大納言實教人々に千首歌よませ給けるに

松間月

惟宗光之朝臣

山嵐にしつむ松との月ハ雲まに出る影とそ見ゆる

詠人しらす　西行法師

ゆくとも誰かしのはん独りて枕にこよひの月をなかむれハ

遠永の法大斎ようしてまつ世語けり

百首の御歌の中に

後鳥羽院御製

いふとわ身にありや宵の月さしく袖にをとける白露

月歌とてよめる　正三位知家

つりとていとひとも身ハふりぬ今ハおもて月を見えん

秋歌乃中に　光俊朝臣

ほかにとも何のあはれハいふへき老の寝覚の秋風の月

文保三年百首歌奉りける時

権中納言公雄

身ひとつハ積もそてふる老か世といふのまに月とそみる

詠人しらす　津守国冬

秋来るる野辺の錦ハ萩似て浅茅か露よすかる月

民部卿資宣

まつを山路な月ハおとつけハ秋ふかき錦乃萩て染ゆ

曉月のかけとよめる

平貞秀

出るより入まてみるも惜の秋の月よには誰か寝覚しつらん

にほひしんを　　前大納言為世

霧はるゝ影は木すゑにうつろひて松の葉しろきあけかたの月

為忠卿家百首の歌に暁明月

皇太后宮大夫俊成

惜めとも影はかたふく暁の月みをしもよそに志られぬ松の葉はし

永和三年九月十三夜内裏にて十三首歌

うしせられけるに月前虫

従三位為敦

露はらふ嵐もしつか月影を草の葉ことに虫やなくらん

題しらす

大江宗秀

秋もすゝし露のやとりに鳴虫の涙数そふ庭の浅茅生

太政大臣

よひのまは只なくなる虫の人の露かりも初しもきえし虫の声

暮秋とよめる

按察使資明

暮る秋は猶まもあれや暮鳴けくれつる根はかりかねと

前大納言為氏人へよみ侍し絵合に

の十三首のうちよ

式乾門院御匣

暮ゆく秋もなかし人の重ねは枕の上にもなにふるき袖覚よ

嘉元百首哥奉けるに

津守國冬

浪とこそすゑをうちよするよる秋風に松のひゞきの聲しらず

後京極攝政前太政大臣

ことし見るわかれもゆふ月の影に三千餘の嬉そふけなき

然阿法師

里人ハ衣うつなりしづまれる那山乃秋や秋風ぞ吹らん

堀河院百首哥たてまつりける時

神祇伯顕仲

うち衣は里人のうつ聲とこそきこゆるよりも夢のはかなき

入道二品親王よませ給ける五十首哥に

前中納言定家

里人や秋風さむき霜のおきゐてぬるもたえず衣うつらん

聲しらず

兵部卿長隠

山は衣うつ音にまじる秋風の更ゆく袖に霜やおくらん

三善為連

あくかるゝ心は里にやさむき衣うつるともしらず月にうつらん

前大僧正光済

嬉しきは秋風さむき里とわきてしやおもひしらん衣うつらん

月前擣衣を

鎌倉右大臣

さきそめてなかはもあけゆく月影におきそふやへの色そ見えん

題しらず　寶篋院贈左大臣

もろともにおきゐし月の影見えて菊の月よりさきにほふらん

九条前内大臣家百首歌合に

従二位家隆

わかやとにはなつやあさきやめの袖の錦風をもかさし

題しらず　前中納言定家

山ふかみ老をわすれて千世をへてさきのまさりける白菊の花

小野のおもひもしらすちこそ花　屏風の絵より

長月の九日のこころけるとよめる

紀貫之

露なからをりてかさゝむ月の菊はちよをへてこそとゝむらめ

題しらず　藤原基任

いつまてか老を忘るゝ花ならんいく秋しもの白菊の花

文保三年百首歌たてまつりける時

前大納言為定

分きつる山路の菊は花の香にぬれそもかさぬ袖の白菊

前大納言實教

日数ふる月ゝ日をそふ菊てゆく袖をは秋を露の菊

秋歌よ

權大納言實夏母

白菊の一もとみえすうつろふや八重咲花のさかりなるらん

旅にて秋風といふ事を

中務卿宗尊親王

旅ねのさむさにつけても色かへてふかきねやに秋を世そく

題しらす

藤原行朝

神無月なかく秋と京今よりいつる柏木の秋風そ吹く

好忠

たゝしきものと見る月よ夜なかに猶見えてまた明ぬ月

従二位家隆

明くれに物のねさへや夜ゐのまのおもふこゝろくるしきそへき

よみ人しらす

夕暮は猿のこゑも音羽山河あらきさへひとつさかり

入道一品親王尊守

山紅葉を

初瀬河あきふりは日かけ出の山本の葉にはまたみちかき

たかしくを

柿本人麿

露霜のかくれしあしたより神なひのみむろの山は色つきにけり

順子内親王

日ならへて色まさりゆく海かくれ峯の紅葉

百くさの色ををそめていつれの村紅葉

前内大臣實

深てきり河音も霧もわかやらぬ雲の梢の秋のもみち葉

題しらす　よみ人しらす

く錦なりし深き山姫のあちこち袖の露も河音も

立田姫のみちれぬ秋の紅葉みなさいたまつて深き霧も河音を

源和義朝臣

むら時雨ふりおく深き紅葉もいまいく志ほかもみちぬらん

津守国夏

く錦時雨のあかねあそれをしになりゆきてかなしき紅葉

延文二年百首をたてまつりけるに

太政大臣

龍田川みちとのみさそやうつろふさきそ小倉なるらん

伏見院に三千首歌たてまつりける時山紅葉

津守国冬

紅葉をもそめやらぬとて立田山嵐吹けはおさとちるらん

百首歌たてまつりし時紅葉

儀同三司

となせ川山もひとつの紅葉にて深てのこる紅葉浪の糸

源義将朝臣

となせ河もみちにむすふ紅葉をも中なかるゝやたえまならん

前内大臣

山さとよりおくとそみる紅葉かゝりてたつ山の端つを
ぞしらする　内大臣
嵐山ちらぬ紅葉の色ならは松の緑も見えしとそ思ふ
弘安百首哥よ　前大納言為兼
梢ふるき紅葉のにほさそひて錦をちりての山ぞ見る
色ぞしらする　伏見院御製
山畑の末葉の浅茅露ちりて秋影とむる有明の月
百首哥奉けれ時　後深草院弁内侍
名残をいふの雲にやとりめくりてあすよりはくもりなき
秋の別ち

新後拾遺和歌集巻第六

冬哥

神無月の心を　　中務卿宗尊親王

晴くもりさためなきこそ神な月おもはぬ時雨や誘ふなるらん

文保三年百首哥たてまつりける時　　前大納言為定

今朝はまた時雨ともおとし神な月日数や冬のしめ覧

貞和二年百首哥たてまつりけるに　　等持院贈左大臣

志くれ行あなしの山の雲はれて時雨にはや里人冬と知らん

弘安元年亀山殿にて十首哥講せられけるに初冬時雨　　山階入道左大臣

袖まても晴の名残もしらぬまて時雨と冬を定めつゝ

百首哥たてまつりし時時雨　　深守法親王

時雨をもいつのまそやとおもひしに袖の涙はかはらぬ色なり [illegible]

初冬の心を　　前大納言為世

風よゆくるへ一むらむら雲におくれてかゝる峰の時雨

源高秀

空高遠木葉のちりそめし[illegible]時雨よかゝる神な月かな

藤原為量朝臣

山嵐のふきそひとやらぬ浮雲にあてよりふる空はれて

前大僧正道玄

まれにみるかたよりかゝる村雲のゆきてはつきて打時雨て

嘉元百首歌たてまつりける時

津守国冬

山かせにさそはれあへぬ雲のあかつきや空まてめくる時雨なるらん

題しらず

法印慶運

ふりくともわかぬ山路の木の葉より日影とみゆる時雨かな

山時雨とそいふなると

山階入道左大臣

山かせにかよふ雲のなかそらにしくるゝ時雨ふらぬ日そなき

嘉元百首歌たてまつりける時

前中納言定家

あらし吹むかひの雲の村時雨そめもかへぬよみねの松

弘安元年百首歌たてまつりける時

前大納言為氏

嵐山かつちる木葉にふりそゝく峯の雲もしくれて

題しらず

藤原泰宗

吹そふる嵐とともに時雨きて軒もはれちる木葉なりけり

藤原行春

秋の月いまや落葉の初時雨庭と梢に深くなりけり

普光園院摂政太政大臣家にて人々三十首歌よみ侍けるに落葉

源藤経

山嵐の吹まゝに晴て里まで木の葉は梢を色にみえて絶(?)なき心と

前大僧正公朝

足引の山おろし吹て冬きぬといふに木の葉ぞふりまがふらん

前参議能清

外山なる楢の落葉をはらひきて枯野にさそふ木枯の声

百首歌奉りし時

前関白 道家

千たひ何いそく老の涙さへ木の葉よりこそ落初けれ
影しらず

源重之女

冬山の木々の紅葉も落そめて冬おほふゆふにけり

嘉元百首歌奉りける時

昭慶門院一条

梢にはのこりもあらぬ紅葉ゝを庭よりさそふ木枯の風

百首歌奉りし時

権大納言忠光

おちつもる梢よりうすき紅葉かな嵐や庭をとひてゆくらん

貞和二年百首歌たてまつりし時

太政大臣

みたれつる落葉は庭にたまりてもなほ嵐の梢まそく

百首歌よみ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

神無月ふりにしよりそしぐれつゝ時雨のかはらぬ色の梢そまて

堀河院に百首歌たてまつりけるに霜

俊頼朝臣

紅葉の木葉ちりしくもおそき霜にまよふむら時雨

寛平のくとよみ

祝部成光

人めみえぬ山の奥にかよふ里にはあとさへ庭の冬草

文保二年百首歌たてまつりける時

前大納言為定

白妙の冬にたへてもうちなびきたえぬ梢も霜や結ばん

冬歌の中に

皇太后宮大夫俊成

なにはえの芦の枯葉に風さえて汀のたつを霜にや結ぶ

江の蘆と

権中納言為重

難波江や芦のはかくし霜こほり枯葉に乱て満つしほそ

後西園寺入道前太政大臣家十五首歌に
津守国助
入江なる芦の霜枯りふかしに難波乃名をも聞へとも
百首歌たてまつりし時冬歌
従二位雅家
難波江は枯てもしもの芦の葉にしもまよふ浦風ぞ吹
荒しらす
源義種
霜枯や秋まては見えしさえわたる月をかつ見る
平重時朝臣
霜枯の野辺にうつろふ色も見えず冬の月
権中納言公時
国のはよ梢の木葉を吹かせて風ぞはらへば月ぞさしける
弘長元年百首歌奉りし時冬月
従二位行家
村雲のかかれるもむら玉の秋よりも月のかげぞさやけき
たえしくとも見せけり
順徳院御製
時雨行村雲さそふ吹風にさえてや月の山を出らん
百首歌めされしついでに
清滝や岩もる水もよどむ冬の夜はにしるき月影

弘安百首歌に　　従二位隆博

庭まてハやまとむかしをみせし山河のなかれくみし人と見んとて月を

延文二年百首歌たてまつりける時　　寶篋院贈左大臣

くもりなき影やさゆらん池水にこほりもやとる冬の月

題しらす　　前大納言資季

久堅の月の鏡となる水をみかくハ冬の氷なりけり

延文二年百首歌奉りける時　　等持院贈左大臣

ゆきさみつ月影さえてふくる夜はいせしまやあまのすむ遠

千五百番歌合に　　醍醐入道前太政大臣

さ夜ふかき御つてとひゆく浪の上にうつりて月そたちさりける

百首歌めされけるついてに　　御製

風ふけは浪の枕をいとひきてしもやとこよにまさるらん

文保三年百首歌たてまつりける時　　前大納言為定

友千鳥なにをとりとめし浦つたひなきさの浪に鳴てゆくらん

うへのをのことも二首歌よませ侍りける

河浦千鳥

左近中将親雅

浪のをとはさえにふけて満しほに吹こす礒に鳴千鳥かな

題しらず

伴周清

おきつ浪ふけゆくまゝにてしか風の吹こすくるに鳴千鳥かな

貞和二年百首歌たてまつりける時

按察使資明

舟とめてよさむき湊の明かたに友よふ声はちとりなりけり

延文二年百首歌たてまつりけるに千鳥

寶篋院贈左大臣

よをさむみ須磨の関もる秋やさむき友よふ千鳥月に鳴なり

題しらず

源氏頼

旅枕さむきねさめの満しほに芦辺をさして鳴千鳥かな

嘉元百首歌たてまつりける時

贈従二位為子

冬の夜はつらきねさめの友とみよとや鳴くらし入江のやとの月影

題しらず

郁芳門院安藝

逢ことのさはりとなりし水の上に流るうきねを千鳥鳴なり

貞和二年百首歌たてまつりける時

等持院贈左大臣

夜はふけていかにやまきの鴨のなくねしもさぞわかるらん

題しらず　　権大納言具通

さくら浪よみもまた鴫鳥のうき巣をとけてわか池水

百首歌たてまつりし時水鳥　　左大臣

うす氷とちやらて池のみ鴨のうきねをさえて波哉

題しらず　　二品法親王兼覚

みなつきはおほ井まてゆく浪をまたせぬ山河の水

正三位成国

あえく小松か上はおほきさておほよと流る山河の水

百首歌たてまつりし時おほ　　前中納言實遠

おちたきつせゝの流は岩こえてゆくせはやさる山河の水

おなしこゝろを　　藤原長秀

さそふ河つかの間の流もしをかけにはまた浪に継し

貞和二年百首歌たてまつりけるに　　入道一品親王尊圓

網代木にせかるゝ水やこのころハ冬となりける宇治の河浪

題しらす　　惟明親王

あしろ木によせくる氷魚ハたひ〳〵てゆくへもしらぬ宇治の川浪

冬歌の中に　　従二位家隆

時雨行よもの村雲たえ〳〵に文月の空にわかれゆく也

後二条院御製

嵐吹峯のもみちの冬枯よなたましぬ玉は霰なりけり

百首歌たてまつりし時冬

入道二品親王尊道

さゆる夜はさえも空ゆく月もかけたる月はなまめくれちる霰

弘長元年百首歌たてまつりし時同心を

常盤井入道太政大臣

枯そむる霜の下葉の萩の色もさくらにおかれたる

をしらす

源頼元（光）

かくてこそ増ましていとたまもゆやきをはらふ人の霰哉

延文百首歌中に鷹狩

寶篋院贈左大臣

老ふしやそのゝみのよ鷹かりの思ひもみえし狩衣

枯なしんを

源貞世

うち鷹かりの山の木枯にやかへりとまて鷹狩して行

延文百首歌たてまつりしとき

前参議實名

見わたせは霧の夕暮におきまの川風寒く吹

百首歌よみ侍りけり

皇太后宮大夫俊成

みすゝかる小野の小萩は霜も葉も枕と旅にならぬまぞ

百首歌奉りし時

按察使資名

猶くのくれはふりつゝ鈴の音にたにおとせぬ谷や草のいほ

題しらす

寂真法師

見わたせは遠の高根のおちこち中〳〵雪のつもりそふ

弘安百首歌よ

前大納言為兼

この里は志賀の山まてうつもれぬ雪の明かたの月にふりまさる白雪

百首歌めされし時庭雪

御製

峯はまたよそのあかねは深みとて庭よりあけぬ

眼雪ともしるき世ぞなけれ

亀山院御製

なかめくとめゆく山の高ねより横雲わけてふりまさる雪

題しらす

藤原雅孝朝臣

ほのみえてあはしの杜もしらねみえて雪にはよその峯のよこ雲

権大僧都経賢

月は猶雲まにおつる影ふりて雪に明ゆくをちの山

よみ人しらす

足引の山よりおろさはわかやとの時ならぬ雪に深し雪なり

庭雪を　　従二位為理

今朝はまつ友なふくにはそれて人をともまたぬ庭の白雪

名に高き百よそてまちけるに

前中納言定家

わか山峯の木枯さえさえて雲のゆくてにかかる白雪

雪の方乃中に　　前大納言為家

夫田の小松生しけれは山風のなかれ岸は雪深よりり

津守国貴

けさは猶まさる霜枯とみゆるまて初雪さむき浅茅生の庭

後徳大寺左大臣

久堅の空も隔の山おくの雲を迷の山よりも雪吹まよひ

樵路雪といふことを

源兼氏朝臣

行てまたつもれる雪のきこり山の松の木かけに流るる雪かな

越しらす　　津守国助

吉野山ふくらむ白雪のふる里あらく風まよふらん

法印那経

みよしの山の夜頃の雪のえよりも雪ふる里は人もかり

源氏経卿下

杉山の正木のかつらくりかへて雪ふりにけりとやまへの里

源有長朝臣

誰か又高間の山の峰たかみ雲にまかへる峰の白雪

二条太政大臣の家にて歌合し侍りけるに
雪をよめる

仲実朝臣

みよしのは雪ふりぬれは山人の道もたえてや冬こもるらん

弘安元年百首歌奉りける時

従二位為家

降つもる雪の下折れ風ふきて松のしつえにかかる白露

後鳥羽院に奉りける百首歌の中に

光明峯寺入道前摂政左大臣

跡たえて人やはとはむ雪ふかき山路の奥の雪の夕暮

百首歌よみ侍りし時庭雪

右大臣

草枯の入江の芦の難波かた雪にうつもる雪の夕くれ

野雪を

入道二品親王尊道

立のほる煙そ見えぬ雪ふかき野への庵の夕くれのそら

源義将朝臣

ふるさとは雪にうつもる野中の道もたえぬる雪の白妙

法眼行済

思ひしらす

とそふる日数のうちに積もれかしこゝろある人の庭のしら雪

閑居雪といふ事を

法印浄弁

山ふかきすみかならすは庭の雪にとはれぬ道をなけかまし

わか宿はふかくも雪の降にけりなふ

寂蓮法師

山人のかよふ道をもうつみてそ跡たえぬとて雪ふりつゝ

嘉元百首歌たてまつりける時

贈従三位為子

ふりはむかふかれ〳〵にいとまなき庭の白雪

題しらす

前大納言為世

ふみ分て出つる人の跡とたに又ふりうつむ庭の白雪

千五百番歌合に

小侍従

ちりつもるその昔をわするゝはものにつもれる雪をみるかな

題しらす

式部卿邦省親王

庭にそてつもれる雪にうつもれて松かえ梢の雪をおとすなりけり

文保百首歌よ

後三条入道前太政大臣

松さへ伝せ吹かす磯の岩ね松にこそ風ふけは雪たまらす

海島雪と

元可法師

ふりまぬ烟を宿のしるへにて雪にしるくも里のまよ人
たかしんを　権中納言為重

わたつ海の波をひろはぬ日も雪そ沈の淡路島山
見しらす　従二位行段

月かなくよからんとそ思ふかなたの山にふまるゝ白雪
卜部兼直

雲のかゝる富士の山風たえて煙もみえぬ雪ふかき頃
源頼春朝臣

さむき日に狩するあさは炭かまの煙は雪もつもりはてけり
前大納言為成

すみかまのあたりの松も埋もれて独の煙は雪よりそたつ
炭竈煙といふことをよみ侍けり
寶篋院贈左大臣

炭かまの煙の末もおもふらし雪吹おろす小野の山かせ
よみ人しらす

あけさのゝ大原山の炭かまに思ひもえせぬ月をいかにせん
百首歌よみ侍ける中に
贈従二位為子

いつまてか煙もたてんふる雪に爪木もたえぬ小野の炭竈
宮中歳暮を
光俊朝臣

あたら月にとつもれる歳の暮なれはゆくはかりとふくらむかな

題しらす　　前中納言匡房

去年川なかれてはやしとおもひあらたの影と暮ぬるに

正中百首歌に　　權中納言公雄

なにとなき世の人とはまされてそ暮はてぬるを情なれ

歳暮の心を　　信實朝臣

たちゐける八十あまりの年の暮つもりとくれもしらぬおもひに

寶治百首歌たてまつりける時

入道二品親王道助

おいそ又来めの松山むそちにもちかつく年のたえむとすらん

延文百首歌に　　太政大臣

今はむそちにあまる老らくの暮まてとしの暮

貞和二年百首歌たてまつりける時

入道二品親王尊圓

色まつといそちの暮のはかなさを何にかさねてとしのくれ

新後拾遺和歌集巻第七

雑春歌

貞和二年百首歌めされけるついでに

花園院御製

月はなほつれなくそ霞みのこりけりしるしともなし春はきにけり

春の朝によめる

選子内親王

春してもおなしつかさに鶯の年ふる声もめつらしきかな

寛和二年殿上の歌合に

大納言朝光

氷とく風のをとにや梅かゝをさそひて春をしるらん

朝鶯を

入道一品親王尊円

出そむる朝日のかけの花にねくらはなれて鶯の声

題しらず

信専法師

入しより春しらぬ身とおもひしをみ山にてこそ花鶯

前関白 道嗣

こゝのへの花とみゆるまておもへはくもゐの雲そふる

権僧正頼仲

しかの浦の春よりさきにすめるや桃しらぬ山の桜咲らん

為冬卿

須まの浦よりかよひすめるあはぢ嶋のあかりとそみる

従三位定久

わかつむ我ゆかりのきえ袖てよそにみえぬ霞かな

源直氏

知らすあはぢ嶋原に打むれてひとつ霞にかゝるふねかな

権僧正良雅

始め分出明石の瀬戸へ入霞まよりゆくふねもわかれぬそむ

二品為連

まよふも嶋かくれゆくや春日影あかしの霞にそへてかくれん

春の歌とて

津守國貴

花にほひそてよそにかほる梅のかを袖よりもとて春風ぞ吹

瓊子内親王家小督

あかなくにかすみにかゝる山の端も春の月やどる袖までもすます

山階入道左大臣家十首歌に春月

源兼氏朝臣

今宵はくもりてそても春の月みせよ花の陰かゝるとも

後醍醐院御時三首哥

うしせかれゆかぬあかしくもを

前大納言為世

かすむとも見る春よりや我か月花の色もまそてみさゝ

題しらす　前中納言定家

花ならハ我ひとりすむ影の秋と月やあらぬとわふるらん

文保三年百首歌たてまつりけるに　法印定為

花鳥の外そとかこともそ深くそ見ゆる影の月

題しらす　清原通定

花の月誰ゆへにかは遠さかりてひとりすむともわかる影の月

小倉の山庵のひのわかれつるひとりさて

とまりすむ歳もかけける庵にて影月とふとそ

權中納言公雄

住うさに志遠くなる宿のうくみるにもすむ影の月

百首歌たてまつりし時影月　従一位宣子

山のはをとにほひて影の月霧の庭よ影てさやけき

題しらす　津守棟國

吹そ行雲ゆく影のおのつからかはりなきこゝろたしかる色を　藤原雅継

我ゝはひとりもしらぬ契をもあはれは思ふに影の残らん　淨阿上人

盛乃花も盛をもみる老の身にいかにけ影のかりの縁

前大僧正公朝

なかなかも越路の雪もまたきえぬいそてこそ花を見つる

百首哥奉りし時

津守国量

桜ふく風もいとふ山桜ちりなはまつや尋ちらさん

題しらず

道甚法師

おもひ入みちには咲そめて人よりさきにみる山さくらかな

法印實性

咲やらてまたるゝほとの日数より盛ひさしき山桜哉

前大僧正慈鎮

山桜とふあまりに世にまたはもとよ人の命なりけれ

人々題をさくりて哥よみ侍りしに山花を

中務卿宗尊親王

見よしのを花の都と深世の山の高ねはいかなる色に花を咲くらん

題しらず

式部卿邦省親王

山桜咲そふまゝにさくら姫の家の神におもほゆる哉

権大僧都経賢

出そむる月は梢にみえなから桜葉にそ花のかけなる

源経政

まつを山花のかをりはさやかにもしるしよそれとみえて入相

寂真法師

咲ぬれは外山の花や伊駒山かゝる雲とも見えすなるらん

弘安元年百首歌奉りける時

法印定円

きゝ初る名たかき山の桜いく雲に見えてそ遠く咲らん

花歌の中に

津守國助

宿りきぬ吉野の河原やうらうらと遠かた野に花の浪かせ

前大納言為氏

行くもむかし我宿の花よりは桜をひとり春風そ吹く

法印頼俊

逢坂の関の戸もなかりけりゆきかふ人をとゝめにまかせて

藤原茂範

山里は花ゆへ人のまれなれはちりても誰を恨むへき

法印源全

咲ぬとて人はまつらん山桜有明の月もしらやとるらん

深守法親王

のとかにそ中くらゐ山桜くもりてそ人の散をしむ

五十首歌たてまつりけるに花下送日といふことを

後鳥羽院宮内卿

花ゆへに日数もしらす過ふとてやはかなく人の我を待らん

文保三年百首歌たてまつりけるに
二品法親王覚助
年〻の花にわかれてもふりぬる身のこゝろやのこれる春を惜き
前大納言経継
めくりあふ世に春はいとしく過ぬれは命つきぬともみれは惜しからす
祖月法師
思出のなき身となりつゝ春をしなは八十の花やのこらん
賀茂雅久
七十の春をもあかすなかめつゝちるもやつまりの身をそ見る
大江廣房
山桜の花は花とてもあかしものゆくらふるやならん
信専法師
うらむなよ深山の桜花都の春にいてゝこゝろを
題空上人
春とは惜をそへんとやおもふむかしてなかめての花のなみたん
よみ人しらす
乃連はうちちりてもおしまれ春とはもみさく里は花の色も
落花のこゝろをよませ給ける
覚増法親王
吹はらふ嵐のまゝにちりぬらん桜はおとにさそはれて庭の雪風

題しらす　道英法師

春ことに庭はいつともしらさりき梢や花の雲になるらん

源義則

ちる花の名残を庭に吹とめて木のもとにほふ春風そせ

源頼澄

春もなほ雪とつもれは跡こそしつかなりとはれやみたとりまし

津守国久

ちる花のあとにまたる雲は日の光にふかむ峯のしら雲

淳家法師

暮そめて雲はまたぬ木のもとにいてて桜の雪とちるらん

藤原基任

ゆふ日さす雲や嵐に晴ぬらんちりてそ花の跡もそへるふき

源頼貞

峯よりの雲をわけきて吉野川嵐にまよふ花の白浪

正三位通藤女

わけ入るさ袖ともみえて山川に風のさそふも花のしらなみ

源頼康

山桜なかるるをせきとめて瀬々の埋木花咲にけり

水上花といふ事を　為道朝臣

山おろしの桜吹まく志賀の浦によせくる立そふ花のしら浪

題しらす　源有経

むかし見し山のさくらの嵐吹は花をしもせくしら浪

恵とて　素性法師

春ふかく成ゆく草の浅みとり野原の色はかはりにしと

雲雀をよめる　権大納言忠光

影つくる野沢の水の底きよしはあまもしつむ夕雲雀か

法印慶運

野はふかき山のはそれか夕雲雀かけるもおつる声をきく

貞和百首奉り　前中納言為秀

雑たかいはたの菫咲しより小野の芝草も日かけ見え

春哥の中に　源義将朝臣

さくら川末せきいれて苗代は神のみしめをひくやたてまし

題しらす　摂政太政大臣

袖にほふ昔おほえて梅の小鳥よりも山吹の花

法眼頼英

吉野川いはと柏もさかへて花かつみなみのやまふき

平重基

山吹の花の中はふく分てとそいえた山吹の花

源直氏

ひかりなき谷にも春の岩つゝしいつて入日の色に咲らん

五位職事に ぬかつく行けは松も友ととふ とゝと

民部卿資宣

春日山松にかゝれる藤の末葉は今そさかゆく

見えしらす

儀同三司 實

花盛し山は春葉に咲藤の色にも秋の春やかへらん

前大納言資名

くるれはもとらねともつとも身をさかとる雲に入らん

源高秀

春のねの秋つかりや鶯なれしものゝとなるらん

藤原宗遠

とゝめぬ影もとまらす春とてひまなくうつるもの葉

左近中将具氏

をしみてもぬ命の程よ別ていつかはとむしく春ゆくらん

前参議雅有

弘安百首歌に

数ならぬ身よはよそなる春なれと今ふの別は程やしらん

権律師恒輸

首夏の心を

大井川春をとゝめぬしからみや藤も岸の世にしら波

夏歌の中に

津守国夏

なそ撫春くれて咲もなれは秋の梢ゝてみゆる

平師氏

夏山の青葉にしけるゝ咲もやらぬ花をくるゝ梢なるらん

文保三年百首歌たてまつりけるに

前参議為実

りつ川いはふみならす年をへてこえてもいけるならん

延文二年百首歌奉りけるに郭公

前大僧正賢俊

なきまてそこゝろ月しもあれは子規我もおもひをつまつらん

おなしこゝろを

権律師兼恵

いつかりまち物に郭公きゝてつまなきこゑなるらん

信空法師

待わふる山郭公人はてゝ雲ゐのよそにたつねなかれ

昭覚法師

時鳥聞ときあかぬ袖ならやそ待日あたりのそらなけれ

二品法親王兼覚

ことしほとゝきすこそさらに子規月にまつまなさきも恨まし

法印源意

まち雲ゐにはそるもあかつき時鳥しはつやまのまつらん

文保百首歌奉りける時

後二条入道前太政大臣

ゆくゑのみまたれしその時鳥くもゐのよそにやまた鳴らん

待郭公といふことを

前大納言為世

まちかさとしのひしほとに時鳥いまやまつらんあけほのゝ空

聖尊法親王

ねぬるよに我そ待ける郭公なれもかくやは人をまつらん

法印澄潤

よし待ゆへまつまの時鳥まつとしらすや有明の空

宝治二年百首に

太宰権帥為経

郭公きかぬ限はまつとてもねぬ夜の数はかさねきぬらん

夏歌の中に　小弁

まつとまに夜はふけぬ時鳥きての夜はねとるみなまし

いく数もあらそふきかぬ子規くもの限なけれは

藤原永行

山ふかく思ひてさけは時鳥まつらん雲になくなり

清原良兼

時鳥まつ里ならぬ旅なれやきかぬもあまたかさねぬる

祝部成広

よみ人しらす

鳴かずとてそれ時鳥一声のまたしと力もなく初音ぞ

藤原宗秀

よひのまは忘て明ぬる郭公かくれは月の影にかなしや

昇殿ゆるされてのち郭公を聞て

卜部兼熈

まちわびつ雲井の人の時鳥ことしそひかりの初音きくとて

題しらず

藤原基名

待人のおとなひならねども時鳥まつのさ月は声ぞ待みる

源経氏

捨ねて岩かき沼のあやめ草きさみこりて引は物かは

卜部兼直

もろ人のあさなにつまてもあやめ草けふは軒にふきそふ

前内大臣實

雲かゝる梢の夕暮の五月雨に河辺の水ぞまさりける

平貞秀

難波より見えし雲まも伊駒山今はさみだれそれとかくれし

紀親文朝臣

いつくにも日数ふるまでもちこされて関や五月雨のころ

橘遠村

ゆく水の河なみたかきもわたりかねて八十瀬にかゝる五月雨のころ

河五月雨　　為家朝臣

吉野川かはせも今はさしもやはなみこす五月雨のころ

題しらす　　源光正

水まさる淀のわたりも末つかた見えわかぬまて五月雨のころ

題しらす　　源氏善

五月雨は狩田のふるさき漆田はたゝ早苗もとらすそ〔?〕

よみ人しらす

ゆくるゝ田面の早苗のこえておりたちかねてみゆる〔?〕

浦るさへ早苗とるらしふるとき

前左兵衛督教定

さみたれは里の海人のはやりかも浪の袖もほすらん

題しらす　　前関白道家

山かはのなるみをせきいてゝもをちこちの苗もはてぬ〔?〕

平常顕

水萱のはしの岸の村雨はさみたるゝころ〔?〕

多々良義弘朝臣

日数のみ降りもり田の五月雨に干す袖もとらす早苗かな

浄阿上人

ふるさとの花橘はむかしの袖の香をしのふけさそ〔?〕

百首歌よみてまつりし時　橘

権中納言為重

ことはみなとのまつにひれ梅よりまさへそよそん神のめくみそれ

文保三年後宇多院に百首歌たてまつりし時春歌

忠房親王

梅の花ふむ人はあまたになりにけり昔にかはる雅楽の道

恋しらす

源基時朝臣

色ちる道花梅のにほひも今はわかれぬ身にしみそ

重縁法師

やそやまくろへぬるゝ夜聲もなくのの淀の雑に月

藤原為量朝臣

夏草はふかくそ茂る清水むすふ野中もそことみえぬまてより

法印宗信

燃ちらさかの志賀京そ露のあまりてそれ飛螢

道元法師

山のをのかゝるかはの月影に光もうすくみゆる螢かな

よみ人しらす

星かけの月のひかりに飛螢たえてそこや光そへてん

述懐歌乃中より

権大納言時光

代ゝの跡はなかれのこゝせ我身こそあつめぬ家の葉なりけり

文保三年百首歌たてまつりけるに

前大納言為世

やそうぢの里にきてまてまつともぬるなるぞ
扇とよめる

大中臣頼基朝臣

閨ともみえぬ扇の袖にほのしき風といふぞなん

題しらす

お条敏實名

楸生る陰にや頼もかくも清きさゝれ夜の中せ

文保三年百首歌奉りける時

後花山院内大臣

夕されはみ峯おろしの吹くにつれ月は夜ともみえぬ影哉

題しらす

源経政

さゝなみやいさやまはふすれい夕陽のかげそ月のほとき

素暹法師

松風の吹おろしくる山水のいはまをつたふ流ぞすゞしき

よみ人しらす

岩枕下ゆく水の涼しさを袖ひつはかりせきやかけまし

瑒子内親王家宰相

みそき川や瀬にはしゝ紗水や底まて夜なかさきとらん

よみ人不知

なとむてふ神の心もとふしけれ河の瀬さすれ夜の門

新後拾遺和歌集巻第八

雑秋哥

題しらす　　　土御門院御製

かゝれは波の露とも消ぬへしたゝやみなれの秋の秋風

僧正果守

一葉よりはつともおちぬ波にへさそふ心ぞ秋の初せ

百首哥よみてまつりし時子雑　　深守法親王

吹よはりわたる秋の露おちて多門のもさえぬ珠の袖
たゝしんと

前大納言公蔭

露おもき色は涙にくさきは一夜秋の風に袖とつゆはかなき

式部卿邦省親王家五十首歌合に初秋風

頓阿法師

行水の淵をはやしくあすか川昨日のふちは瀬にかはりけり

題しらす

為冬朝臣

暮まて猶あかしくめぬ星合の影みるほとに秋や涼しき

七月七日経昔より数れてへまりけるに

あまの河とふ雨そて日の暮ふしくは舟

とゝめて川原におり井けん

津守国基

七夕ハこひこらん天の川いそくまつりに舟とゝめつ

百首歌奉りし時

菅原資衡卿

一秋をたゝ契りなしにて七夕の今日を待ちし恨やハます

七夕露をとよませ侍ける

後二条院御製

七夕の契待まれ涙より露ハ夕の袖やかよく

内裏十五首歌合に秋風を

前中納言定家

おさまれる民乃草葉をとせらかにみちひく田面乃稲葉秋風

題しらす

清原景實

風の音もけさよりかはる萩のはに秋をしらせて露やおくらん

前中納言親顕女

虫の音も身にしむ袖もさひしきは花もとより荻の上風

平英時朝臣

露をこそいつもおきそめてくれの葉をもはらふ萩の上風

大江氏元（一光）

分行や衣にそへん錦露よわまさりてこそ秋萩のはな

露をとよこに結けり

為道朝臣

夕暮は草葉にもれぬ秋の野のとまにありとや袖にうつる白露

延文二年百首歌たてまつりける秋夕

大納言公房実母

昔今おなし秋のならひさは老て世にふる秋の夕暮

題しらす

道意法師

袖の上に露をく夜は涙とひとつに波数そふ秋の夕くれ

よみ人しらす

名のみとそ袖の露けきや物のあはれしらぬ身ならん

前大納言為成

秋の田のかりほの庵の萩咲しより野分ちかく鹿そ鳴なる

権僧正増瑜

我とすゝりか宿ちかき麻のはゝ稲葉の風やたちぬらん

式部卿邦省親王

鴫たちて三重なる稲葉の露の玉つさとまれ結ふ秋の夕暮

貞和百首歌に　左兵衛督直義

あまの原雲かきわけてかゝりけりかくとみし遠かた田の稲葉

百首歌たてまつりし時

津守国量

秋風の吹よはちかく雲ゆけは稲葉によそれて露やこほれん

題しらす

素観上人

遠田の稲葉に風のおとたてゝ露もる浦の鴫なく浪

前内大臣実

雲とよす小田のかなたに吹そゝく村雨すくる秋の夕

秋田といふ事を　為道朝臣

夕日さす山田の稲葉にかけまよりたちそよきて秋風そふく

前中納言公勝

秋よのしきりにさそはれて岸田にかけて秋せく

題しらす

雄舜法師

秋の夜はなかきひは見る月のかけよりもまた志ら露

よみ人しらす

志かしかしくさらふ雲ゆきさきて露かゝる山の月

ふかきやふかともみえぬ晴まより雲ゐにすめる時の月かけ

藤原為量朝臣

應安六年九月十三夜内裏にて三首歌講せられけるに月前雲

權大納言為遠

ゆふへの月のひかりは浮雲にかくれて猶松風そふく

題しらす

權僧正良憲

月を猶木葉かくれのそとにして山ふかくかくれぬるかな

文保三年百首哥たてまつりけるに

後西園寺入道前太政大臣

さえの袖かたえぬ露にやとりきて月さへ影のやつれはてぬる

題しらす

兵部卿長綱

月影も露のやとりやたつぬらん萩の葉ことにおきそふる秋

百首哥の中に

後九条前内大臣

河上に霞まよふみるせ山かつてかへる月そてらせん

文保三年百首哥たてまつりけるに

民部卿為藤

大井川せきいれてみるまに井せきのなか月を

題しらす

藤原昌家

秋ふかくなりゆくやとのしけみにもおきまよふ秋のよの月影

津守国實

おのやは経蛍やなき月影に漕出てみるかな友舟

崇全法師

忘るなよおもひしらるゝ身をしるく埋木とかはらぬ浦にやとる月影

祝部成仲

いつまてか世に在明といふならん月を友とそみる

藤原雅明朝臣

鳥のねはねりその里に落ちて峯より出る秋の月かけ

文保百首歌に

六条内大臣

今そしる山のはちかき月影を身にかへてもと哀とそみる

光明峯寺入道摂政家二十首歌に

後深草院弁内侍

なく涙我と露けき虫の音に秋の草葉はとはゝなからん

百首歌奉りし時

従一位宣子

松虫の鳴とも誰かこさてとはむふるき蓬生のもとに

題しらす

源高秀

矢田野の浅茅か色に消ぬとも枯行てしまて枯ゆく虫の声かれ

丹波成忠朝臣

うつろふは秋のならひと露も浅茅か庭に虫の声

源頼之朝臣

浅茅原末葉枯ゆく初霜の下にも秋の虫は忘られ

貞和百首の歌めされけるついてに

光厳院御製

伏見山ふもとの田面の霧は秋とこめて梢よりさき鴫の羽かき

題しらす

右大弁秀長

よそ山松の入日の影は薄れてまた明かりぬる鐘は打しけれ

一品法親王寛尊

秋とおもへはみえのなく如かなり老の枕に夜そ知らる

為冬朝臣

色まさる野国をいてそのゆふ山の霧は秋さむし夜そふ

儀同三司 實

月影はさやかにそふ霧の秋やさきて嵐の山につきそ残る

貞和二年百首の歌に

後二条前内大臣

露のまに何を思ひて折つる山路の菊の花の千年

題しらす

安嘉門院大弐

物思ふ雨の涙の深けれはつらさ忘るるまてはならねと

藤原嗣定朝臣

それとなく思ふ山の秋霧にいそくこそ入のいそみえゆく

よみ人しらす

河霧をぬらさらあらめ柞原深てもらすきぬる所にそ
大峯晴ゆしきる河筆の岸屋そて流
この紅葉をみんとよもにゆきて

前権僧正良栄

ひとやなきよ出る西霧をわけぬれはやかてこの紅葉

暮秋紅葉を

源頼隆

あらそひて河霧も立つ柞の森を深てしめる紅葉

暮秋月を

藤原朝村

長月の有明の月みゆるかり河霧はれぬいそのかみすらも

題しらす

権大納言實直母

きよふとてはなれぬ霧のたちこめて秋のわかれや
河霧とよめる

光俊朝臣

うちはらふ波はなけれと神かな月のさやかなる河霧

なくしんを

中務卿宗尊親王

秋のそこゐも見えぬ河霧のみなとてるしも河霧の袖かなし

源経氏

ゆりそむるかとよりなみたにしつとひつつ河霧にん

元可法師

名とりとる河霧をつくしもたえぬ世にかくりの袖なりけん

道洪法師

まくらとふ人は形をとめてあらそをとはね覚よふる時雨哉

冬夜中に　藤原懐道朝臣

あましゝ彩は木葉に埋まれてくもりぬ時雨哉そ

松風似時雨といふことを

鎌倉右大臣

梅のねやもとまるよを吹ふる時雨哉木葉の降は峯の松風

百首御歌よ時雨を

土御門院御製

呉竹の緑は時もうつらねは時雨ふりにし籬ともなし

松尾山を

権僧正経深

里までは吹もをとさぬ山嵐に時雨てとをる嶺の浮雲

人丸

山川のもみぢ葉流るゝ水上につもりの木葉はなしかるらん

延文百首歌に落葉を

摂政太政大臣

見る人の川なかれて渡らしけん峯よりおつる木葉なれ

散しらず

栄顕法師

もみぢを誘ふ風も苦ゝそまきさそふくもる山嵐

権大僧都宋親

秋はみな色白ひもそれなから霜に移ろふ庭の白菊

源直頼

おく霜に移ろふ庭の白菊も秋なき時の花とこそみれ

百首歌奉りし時霜

前関白 道家

朝日影さすや軒はの霜とけてしつく窓におつる雫

題しらす

在原滿親

風さむき入江の芦の夕霜に枯てもさやくおとそ聞ゆる

祝部成豊

難波かた入江の芦は枯しより浦吹風の音そさひしき

建保四年後鳥羽院にたてまつりける百首歌

り

寂蓮法師

月清み霜やまさるは白妙の袖にさえける夜半の霜

題しらす

よみ人しらす

しくれつる松の木葉の上は晴ゆく空の月

百首歌奉りし中に

土御門院御製

龍田山よみちや霜に成ぬらん河浪白き冬の夜の月

題しらす

式子内親王

玉の井の水のおもにみなくや月さへ嵐の霜とおもはん

是法法師

よもすから山下風吹て寒けれは田上河にこほる月かけ

権僧正円守

さゆる日は水もこほりて山川の下ゆく水も音やはする

澄覚法親王

夏なからはるかに遠き松陰の岩井の水は汲そわかるらん

源和義朝臣

雪ふるとおとにきこえし関の戸すゐのそむかくるゝ世をやおもはん

法印長秀

うきす濁ぬ流の桃よりはかりにも友千鳥

よみ人しらず

浜千鳥塩ふけやらぬさよふけて鳴つる声は雲ゐゆく
鳴千鳥かな

前関白 道嗣

遠さかる河をや小舟こきとめて又鳴つゝ友よふなれ
あつまの亀井の水にしみ時なり
かもめさへすみかけし有明の中に浜千鳥と

巌河上人

なみこえて流千鳥なくよひつきの浦よ鳴なり

小槻匡遠

題しらず

いまへの浦おかわかれ濁千鳥鳴立ちても名やおさん

和歌の浦によるよるひとりともなき浜千鳥なくねの跡をとふらん

前中納言親賢女

しほ風にわかの浦路のなみこえて人かすならぬちとりなくなり

三善為永

さゆる夜は汀ふかくに絶ねとやなみのたよりの床にこほりの

陽子内親王

霜よそにおくもいさ さゆる芦鴨の玉もの床はつらかりけり

前大納言隆房

百首歌の中に
水鳥

民部卿實遠

大井川井せきの浪による鴨のうきねかさねてよはにさえつゝ
わかれしへと

源和氏

おし鴨のむつましかりし池水やこほりとともに汀なるらん
見しらす

信快法師

池水のこほりの汀の芦鴨はふさまたえてや我もとふらん

前関白道家

見しともなき浪もこほりて網代木にこよひはかゝる宇治の川風

円昭法師

河竹のふかき夜の袖のうへにしきりの玉とみゆる霜の跡

前大納言為家

嵐こそ外山の峯にふかゝらハ木や雪けしてまてかゝる村雲

通源上人

まつを山峯の檜原をはれて雪の下ゆく谷のおとかな

延文二年百首哥に雪

前中納言有光

降つむ峯の横雲影とめて雪よりしらむ山の端そ

題しらす

前大納言為家

梅かえのねハ冬なからたく歳ならぬわかみ雪に何をまて

題しらす

昭祐法師

雲よりもうへにみえける富士のねの雪ハ何とて降はしめけん

源秀法師

うりて風やふきまよふらん梅か枝つまハ松の白雪

延文百首哥に

権大納言時光

山松もよ松のかけハ絶て木陰よりまつ流る白雪

題しらす

紀親文郎下

本ゝもおなす草にもかつて咲花や竹のさ枝にふる白雪

後鈔院前内大臣

このまにふるかとみつる白雪に花そつもりてさかりなれ

賀茂定直朝臣

訪ねえてとふ人もなき庭ハ雪も降そふかき宿と知らん

雪のあしたにまゐりて侍けるに

等持院贈左大臣

ゆきへに今もありしひて白雪のふるき跡とハ我そつもらむ

返し

前大納言為定

いふならぬ玉ほこの跡そともとめてきつる庭の白雪

延文百首哥たてまつりけり

摂政太政大臣

あつまやの軒やの今朝と待へをもつもりに雪ハふりぬる白雪

題しらす

権大納言宣明

代々とふる庭の松か枝しへの跡のけかすてつもる雪の白雪

内大臣

いふみて跡をもつきむ人そとはおほきに庭の白雪

権大僧都能運

あかしにさかしも雪や我山の松生のえたにかゝる白雪

延文百首哥中雪

摂政太政大臣

時しあれハ今こそあふ坂の関の白雪ふりて

百首哥たてまつりし時庭雪

侍従為敦

庭の面ハわけしひとつふみて跡まてかへる雪の跡をみえて

堀河院位におはしましける時南殿の小菊
に雪ふりかゝりたるを見て人々に
よませられけり　周防内侍
ゆきてみぬ人のためとや九重の内にもしらぬ山
返し　中宮上総
こゝろをも見よと雪まをなかなかに大内山につもる白ゆき
題しらず　湯陸院少将
山ふかみ雪にとちらるゝ柴の戸のあけぼのまでにふる白雪
性威法師
もし鶯の木居の下草遠よりくれのこゝろ雉子鳴也
権律師則祐
篝火のうつるも水のなかし鶯の羽音も見えぬ夜はに
紀盛家
あはれとやそでよりふる人や篝火のよつら山路かな
源兼継朝臣
風寒み鳴ふくしは見てまたさむしる園のつゝ火
炭竈を　兼好法師
をしみともとし年のくれゆくおきまぬか炭やきのつま木かな
よみ人しらず
降うつむ雪のへつもとすゝその烟は籾そいたちてみえける

もしらず

大中臣朝廣朝臣

月ことにをしみあまたのとしをかさねてつもるを老と何思ひけん

藤原信良

いたつらにすきし月日のはやせ川はやくもよする老の波哉

權大納言實直母

うき身まて待ちもいそかぬ春なからいそく年の暮哉

前関白 道家

見る人のいそくにまかせてあるをやくなる年の暮哉

花山院御製

流くることもよしとて年月をつもりはかりにかそへなるらむ

歳暮の心をよみ侍ける

寶篋院前太政大臣

あまつ月日のかはらぬほとそはかなけく年のくれ哉

新後拾遺和歌集巻第九

離別歌

題しらす　　権中納言敦忠

わかる袖とおもはゝやくも別とはいはましものを

中務

ゆく人をとゝめかたみの中にしもしるへなきことゝはかられ

大江千古か美濃へいきけるにさかつきさす

とて　　中納言兼輔

わかるともふかくむ別のゆくすゑはいりそめてそおもひける

題しらす　　源兼澄

わか人はおもひやるとも海山はそれか別のしらくものさき

遠き国へまかりける時おほえなるなかの

をとこのもとへのりたまてつかはしける

藤原為範

君かよは和歌の浦はのなかれ舟たよりしらさはおもひゆかなん

ともちかきまかれ遠きたよりにまかせてそみやこには

よみ人しらす

おもひきやよそにのみきくことのはをことつてのみのそてのしほとけ

猿よゆかりけるへり

中務卿宗尊親王

はかぬ世のならひとはしき限にて命ながらはおほまことにて

琴ならひける人のみちのくに下りけるに装束つかはすとて　女御徽子女王

今よりはさゆく末の松風とよそのとやこひ通はなん

實方朝臣みちのくにへ下り侍りける時たまはせける　花山院御製

なにとなくおもひてとまる道はいかに世はまとてへのゆくらん

信濃へまかりける人に大納言師氏たむけし侍りけるとてよめる　貫之

君がゆく所ときけば月みつつ姨捨山ぞ恋しかるべき　中宮大夫云宗母

志のへとやなほゆく月に契りしを

清原實惟あつまにくだりて侍りけるに申しをくり侍ける　藤原頼明

ゆくへのみとかすは足柄の関の神もとおしやるらん

堀河院御時百首歌奉りける別　藤原仲實朝臣

とまるべきなにともいはぬ別ちは志てふるや関となるらん

権中納言師時

玉きはるいのちしらすも別るゝ人と頼みし月日も老ぬるま

題しらす　　法印實清

命あらはめくりあはんと契りてもなくさめかたきわかれの袂

よそ人しら次

いのちありてわかるゝ際はさのみこそ又逢まてと頼むへけれ

百とせにめしける次なり

順徳院御製

契りすゆくもへても逢坂の関は志みか影にさそはれ

あつまのゝこゝろへ行へき小萱原のつゆ

井堰とふ雨によみ侍けるのりかへし侍て

侍りけり　　為道朝臣

忘れてはおもひさためぬ小影をみるよりしらぬ人をそまつ

題しらす　　土御門院御製

船寄る小浜のまつりを舟はこえぬ別も袖ぬらしけり

りのへゆくへも饑とて

藤原長能

いまは今もあらそや我とひきとゝめぬ別する人

後彩郎下りのへまかりける時つかはしける

大藏卿行宗

たのむへき我身なりせハいくたひもゆきても見よと君にいはまし

帥になりて下けるに別をしむとて津守
國基六十にせまりて君ハさまはへといへりける
返事に　大納言經信

こゆるともたちゆく月をまちみしれ松のよはひと
いのちをしめや

新後拾遺和歌集巻第十

羇旅哥

嘉元百首哥めしけるとき羇旅
民部卿為藤

しらて行ひとの旅衣ゆきてハいかにとかゝらん

旅乃哥とて　後芬陀利花院前関白内大臣

なかくともおもひし日数ハつもりきぬ旅行末さき旅にこそなれ

文保三年百首哥たてまつりける時
前大納言為定

やとからひとよかりねを出しより屋てて日数のつもるはるかな

題しらす　平政村朝臣

都出てけふこえそむるおふ坂の関や旅ねのはしめなるらん

嘉元百首哥たてまつりける時関　後照念院関白太政大臣

こえてゆく杉の下みちやらて鳥のねにてきくあふ坂のせき

百首哥たてまつりし時旅　前関白 [illegible]

鳥のねは関とはこえて逢坂の山路はよりそ明わたりけり

題しらす　後鳥羽院御製

駒なへて打出の浜をみわたせは朝日にさはく志賀の浦波

柿本人丸

駒なへていさみにゆかん立田山しらくもかゝる松の葉かれ

小式部内侍

人もこえ駒もとまらぬ逢坂の関は清水のもる名なりけり

旅行のこゝろを　正三位経朝

ゆふ旅のいさ里は志ゐてとまるまし遠近のむさしのはて

源頼貞

雲と思ひてすきにけり梢のそらにみえし本のやま

尭孝法師

里まては何とく遠からむ山かけの雲に宿やとらまし

題しらす　藤原政宗

わきて又独やゆかむ秋の夜の月は友なふ谷の山こえ

武子内親王

たちのつゝ遠人おもふくよ山へとこゑわかると

延文二年百首歌たてまつりし時猿

後山階前内大臣

足引の山の岩屋のやは雲より雲に日数ふるらん

後光厳院御製

露のしけき秋をもいとはり住ぬ山の岩日数ふるらん

題しらす　藤原為盛

ゆくすゑといくゑ山のつゝきて猿の声ふるさとをきく秋て聞

百首歌たてまつりし時　河猿

権中納言資教

紅葉の衣となりて猿の声もちよる宿にへとはつ

猿の声とて

従二位厳子

ゆきかへる露の岩をしやすらふ猿の声まての

藤原基世女

雲のふかきのへはるかなる衣野の山乃露をもさそひてそなく

兼好法師

歎く草の枕の露やこたへなむしくるゝ山風そふく
峯より出て又おつる水の流れゆく
けふこさやの中山にてよしゆきまつ

僧正行意

これなりとふくさき嵐に雲まよひてし秋は稀なる峯の山

題しらず

法下雅経

露ふかき草の枕に雲絶えし秋の夜の床乃山かせ

法眼澄基

嵐ふく野原の草の露みたれ結ふ旅の夢そさめぬる

よみ人しらず

草枕猿はいかに聞きてそあまりぬ人もなしとなくらん

中務大輔公宗

行暮てかりにも宿をとふ猿の声さそふ松の嵐やきく らん

八幡宮乃歌合に羇中暮

後久我太政大臣

暮てはいつく小宿とたのむらむ峯にかゝれる雲の秋也

題しらず

前参議為實

今はねよとて山路にかゝる家もなし松の峯の秋風

源経直

行末の宿をやいつく定めん暮ていそかぬ旅人

祝部尚長

わか為ハ法ひもとねかふさらのむさしハ京ま宿や
よそ人しら次

あつまのね宇津の田井ま磨あそて宮ま猿へと妹ま告
猿の声れ中なり

刑部卿範兼

もろ道やいろことつるかの梢そてことしとは猿とこそいふなすれ

按察使公敏

とひねとよりてもせあてふかさしハ許よかりふ篇猿然

常盤井入道前太政大臣

かりねするみやまのおくの蓋遊しこさゆふも猿の露けさ
啼猿といふ事を

権中納言為重

いそけとて啼くとこゑの猿ねかねちて山路ハ露ふかくも
泊瀬まゆて暁まろ小川崎のみ
ちけりとみてくるの

源兼氏

河音も猿の声もやとしかめまくら秋ふかくもこそなけれ
聞しらす

和泉式部

君なくてなくねをこそせふる旅寝のとこのみ月を猿みなむ

百首歌たてまつりし時旅

左大臣

都をはともにみ出し月まてそこゆる白河の関
和歌の浦まてなさそひきにけり

後京極摂政前太政大臣

夢よりもなほ逢坂の旅ねかな都人にも月にとはれて

題しらす

定為法師

かりねとふ月と一夜の契りにて手枕うとくなれぬる哉

道我法師

旅枕いふのゝ原にかりねして露にやとれる月をみる哉

あつまのかたへまかりける旅にてよめる

平宗宣朝臣

山のはにふくるを都とて人はまつらん明の月

貞和二年百首歌めしけるついてに

光厳院御製

草枕かりねの露に我なれて友なふ月もあはれなる哉

題しらす

前参議雅有

わきもこか今はあらなん旅衣袖にさえゆく暁の月影

弘長百首歌に海路

信実朝臣

月をみしゆかりせしの浦ゆきは忘れぬ涙ちらしぬる袖

百首の歌よみてまつりし時

崇賢門院

暮の秋とも志らて浪そすまてあらそふ生つもる浦舟

弘安百首歌奉りし

前大納言為氏

浦浪のあらき小嵐や成ぬらん沖つ湊とまるあま舟人

題しらす

よみ人しらす

ゆきすきしゆかりもとむるの原清生つもる夫白

源頼基朝臣

浦風の湊にあらきによりてはて舟出そすな

よみ人しらす

あつちるもの追風吹そひてやをてなみとにも舟人

源秀長朝臣

ちち枕して秋まてらむ涙の音にねさめて後も夢さめん

十佛法師

風さき破やの枕夢覚てかぞかぞ涙なみてそ袖

賀茂清宣朝臣

夢なくし結ひ捨つる草枕して秋まて叶ぬ聲のかひ

貞和二年百首歌奉りし

等持院贈左大臣

あつまちはなれしかともむかしのきさにまてと猶や迷ん

藤河小

源頼康

草枕かりねのとこそへてもあはれむさし野はまたそのはら

宗久法師

むさし野をさすらへてあつ白妙や富士の根たかき山とみゆん

藤原長秀

富士の根をふりさけみれは白雪のおもかけにほふむさしのの原

権中納言経嗣

あらち山ゆへさ夜をもり暮ぬ矢田野の里に枕むすはん

前大納言為定

いかにせんいさ稲かけし浅茅か上を露よかり思しらす

よみ人不知

ある人のおもふゆめやくへこり藤ね露けきさなの志ねり

後法性寺入道前関白右大臣に侍ける時よませ侍ける百首に

藤原隆信朝臣

根分下葉わけしき山城のいはれ小野に絶つそめる

以下
3丁
白紙